

#106

313

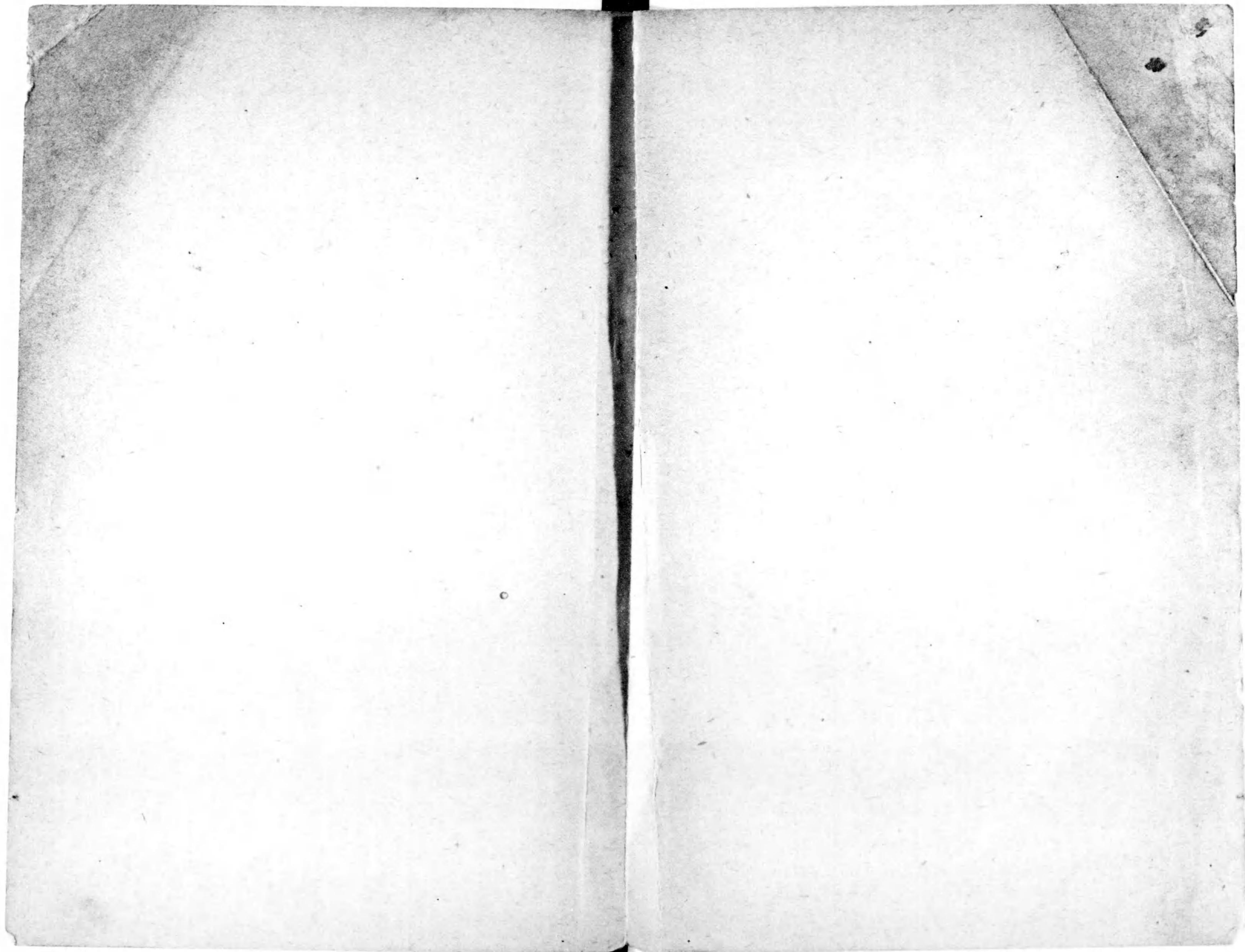
◇ 藤田浪人 著

社會物語

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸ 11 12 13 14 15

始





特106
313

社會物語

【次 目】

- ◇ 第一編 序言、無智と罪惡、思想と生活、古臭い筋書。
- ◇ 第二編 地球の起源と小作人、英雄と強盜、空氣と日光、地球の年齡、獨占の不當、農村の荒廢、強欲な地主、私有の弊害。
- ◇ 第三編 人類の發生と賤民、尻尾の跡、有力な證據、人類の進化、穢多の虐殺、人間の祖先、猿と同族、黒人の私刑。
- ◇ 第四編 原始社會と婦人、家長は女、亂婚時代、母系の滅亡、根本は經濟、悲慘な女工。
- ◇ 第五編 封建時代と民衆、貧乏人稅、戰國時代、一種の強盜、結果と原因。
- ◇ 第六編 資本制度と労働者、恐慌の原因、資本家の起源、歴史の暗示、極端と極端、狐には穴。
- ◇ 第七編 結論、理想と現實、打開と建設。

— 藤 田 浪 人 —

大正
15. 7. 12
寄贈

大正
紅
所
寄
贈
本

第一編 序 言

一、無智と罪惡

獨逸の科學者であつた、ヘッケルが、或法律家の所へ行つて『人間は卵から生れるもので、それが二ヶ月、三ヶ月、五ヶ月、八ヶ月と段々發育して産れるのだ』と話したら、『人間が卵から産れるなんて、そんな馬鹿なことがあるものか』と一笑に附したと云ふので、ヘッケルは『今の學生の多くは、何百條と云ふ下らぬ法文を暗記する爲に、大切なる時間を空費し、人間として最も知らなければならぬ進化論の二頁すら讀んで居らぬ』と憤慨して居るが、之は獨り獨逸のみならず、日本にもこんな法律家が多い様に思はれる、今は昔と違つて生物學を學校で教へるやうになつて居るから、人間が卵から生れるものであると云ふこと位は、知らぬものはないが、それでも男にも女同様子宮があると云ふ話をする、末だ信じない人が多い、然しこれは解剖學上立派に證明出来ることだ、唯不必要なものは退化すると云ふ進化の法則に

依つて、女子のやうに發達して居らぬだけで、形は今でも残つて居ることは事實である。

と云つて某生物學者のやうに古今集の始めにある『雪の中より春は來にけり鶯の、こられる涙今やとくらん』と云ふ歌を讀んで、『古今集とも云はれる名著の中に、こんな馬鹿氣た歌を載せると云ふことがあるものか、鶯は熱性の動物である、その涙がこうるやうでは駄目だ』と云ふエピソードがある、宗教家は科學を知らず、科學者は宗教を知らない、互に見當違の攻撃をして居る、例ひ其學説が誤つて居るにせよ、その教義が迷信であるにせよ、之を知つて批難するのと、知らずにするのとは大變な相違である。

吾々は専門家の様に深く知らなくてもよいが、淺くても廣く知つて居る必要があると思ふ、世の中に無智程恐るべきものはない、愛兒の病氣を快す爲に水天宮の札を吞せて殺した例がある、子を思ふ親の情に變りはないが、彼は無智なるが故に此非行を

敢てするのだ、殊に東京の震災當時、在郷軍人や青年團が鮮人の襲來とか主義者の煽動とか云つて低腦振りを發揮したのを見て、一層此感を深くした。

二、思想と生活

社會を改造するには二つの方法がある、其一つは精神論者の主張する唯心論で宗教や道徳で精神の方面からのみ個人を善化し、遂に社會を改造しようと思ふのであり、他の一つは物質主義者の主張である唯物論で、制度や組織を改造して個人に及ぼさうと思ふのである。

個人から社會に及ぼさうと思ふ精神運動は、キリスト生れて愛を説き、釋迦出でて佛の慈悲を叫んで以來數千年、未だ且て人心は改良せられず益々悪くなつた傾向さえある、宗教運動は全然無意義であつたと云ふのではない、少くとも個人の修養としては爲になつた點はある。有る上にも尙惡事を働く變態的の富豪に至つては仕方はないが腹の減つたものにはバイブルや佛書よりも、先づパンを與へねばならぬ、腹が満たされてから後おもむろに説くべきであると思ふ、『人はパンのみにて生きるものにあら

す』とは半面の眞理だが、然しそのパンがなくては生られぬと言ふことは全面的事實である、殊に時の権力者の迫害から免れんが爲め、祖師の教義を偽り、よい加減の因果律などをこしらえ、現世で貧乏をするのは、前世で悪い事をしたからだ、來世でよい生活をしようと思ふならば、此世でよい事をせねばならぬと、ブルジョアに都合のよいやうな宣傳をやり、プロレタリアを諦めさせた罪は功罪相償うことは出来ぬであらう。

第二は物質論者の云ふ境遇の改善である、確かオースタリーの生物學者の發表であつたと思ふが、同じ親の貝の子に同一の食物をやり、大中小の三種類の器に入れて育てると、大きな器の貝は大きくなり、小さな器の貝は小さくなり、中の器の貝は中位になると報告して居る、これは日本人のやうに島國に生れた者は少さく、大陸つゞきの支那人やロシア人が大きいと云ふ事實と同一である、之に依つて見ても總ての生物は如何に環境の支配を受けるかと云ふことが判るのである、二疊敷の棟割長屋に親子

六人位の者が、折り重つて生活して居る家庭に育つた小供の思想や健康に、憂ふべきもの、あるのは敢て怪しむに足らぬ、彼等は無智なるが故に貧乏し貧乏なるが故に益々無智となる、即ちマルクスの『思想が生活を決定するのではなく、生活が思想を決定する』と云ふ、唯物史觀の哲學は茲にあるのだ。

人間以外の動物の生活は、犬でも猫でも、大抵似た様なもので大した變りはないが獨り人間だけは大きな相違がある、一人で一日に百人分の生活をして居るものがあるかと思ふと、その反對に今夜の米を買ふ金がなくて困つて居る者がある、社會問題はこゝから起るのだ。

三、古臭い筋書

他國に見られない國粹とやらを有する日本も、失業者だけは外國並に二百萬人もこしらへた。日々の新聞に現はれる。強盜、殺人、放火、欺偽、恐喝、自殺等の多くなつた事實は何を語るか、少し頭のいゝものなら筆者の説明をまつまでもなく、『此まゝにして置いたらドウなるか』と言ふこと位は、判らねばならぬ筈だ。失

業者には新聞すら読み得ない無智な階級と、多少現在の世相に對し、正確に近い判断をなし得る智識階級とがある、前者は無智なるが故に、貧困の原因を『自分が働かない爲めとか親が貧乏であつたから』とか言ふ宿命論でアキラメて居るが、後者は今日の失業苦、生活苦を自己の爲ばかりとは考へて居ない、彼等にはマルクスの餘剩價値の論理は判らなくても、生れながらにして何事もなさず、酒池肉林に洵酔して居る者を知つて居る。又政府の大官と結托して、濁富を積んだ男のあることも知つて居る。

タヌキでさえ満腹になればはらぶみを打つ、況んやラヂオや飛行機を發明するまで進化した人間だ、吾々の細胞にはまだ野蠻性が残つて居ると言ふものゝ、面白半分やヨタ氣分で人を殺したり、監獄へ行つたりするやうな氣まぐれ者はない、『衣食足りて禮節を知る』昨日の朝から飯を喰はぬ者には、百の法律、千の道德が何にならうぞ。ロシアでは『働かざる者は喰ふべからず』と言ふ、日本では『働きたくても仕事がない』政府よ、政黨よ、お前達は今何をして居るのだ、五十年前に、藩閥が書いた古

臭い筋書を殆んどそのまゝ踏襲して居る、風邪でも引いたと言ふなら賣藥でもいゝが手術を要する大病人には、賣藥では何の効果もないのだ。

社會學の立場から見れば、人間の社會は一つの有機體である。吾々の身體が多くの細胞で成立して居るやうに、社會は何十萬何百萬といふ個人によつて組織されて居る。理想から言へば、身體は各部が鈞合よく發達し、活力充實して全く疾病に犯される憂なきものであらねばならぬ。社會に就ても同様のことが言へる。今や人類社會は昔時比して驚くべき發達をなしたのであるけれども、決して完全の域に達して居るとは言へない。何となれば社會の各機關は必ずしも調和的關係を有して居ないのみでなく、殆んど慢性的ともいふべき疾病に悩まされて居るからである。肺病や性病などに苦んで居る身體が決して完全な状態にあるものといふことが出来なければ、現在の人類社會が尙ほ幼稚にして不完全な程度に在るといふことは、何人もこれを拒む譯にゆくまい。

第二編 地球の起源と小作人

一、英雄と強盜

米騒動以來勞働問題は非常に盛んであつたが、其後世の中が不景氣になり、それと同時に稍々下火になつた傾がある、所がそれと反對に今度は農村問題が八ヶ間敷くなつて來た、何しろ『農は國の基なり』と云はれて居る日本だけに、此問題が各地に擡頭することになると、工業方面に於ける勞働問題以上の大問題である。近頃盛に沸騰して居る地主對小作人の問題も、結果から見れば面倒な様であるが、原因から見れば何でもないと云ふ、今日問題の中心になつて居る、土地は如何して出來たかと云ふことを考へて見る方が解決が早いと思ふ、今の地主は土地を如何して所有するに至つたか、地主と雖も生れる時は、小作人同様に赤裸で生れて來たのだ、然るに如何にして彼等だけ土地が出來たか、親父から譲り受けたと云ふ、親父は何處から土地を持つて來た、其の又親父から受繼いだと云ふ、其の又親父は何處から持つて

來たか、斯うして追々押詰て行くと、結局は變なことになるのだ。

今日地主として勢力を持つて居る華族は、封建時代には信長や秀吉や家康の兒分をして居たので、當時彼等は徒黨を組み暴力を以つて各地を強奪したのである、歴史家は秀吉や信長を英雄だとか豪傑だとか言ふが、私は彼等を強盜以上の何者でもないと思ふ、若し人の物を取つたり殺したりすることが偉いと云ふならば、毎日新聞の三面を賑はす五人殺しや七人殺しの強盜殺人者は、古今無双の英雄豪傑であると思はねばならぬ、總べて物事は大仕掛にやると善意の解釋をされることがある、私が何人かの懐へ手を入れて金入を取らうとする、其の人が之を拒む、ピストルか短刀を持つて相手の生命を奪ひ、財物を強奪するならば、判決の結果を待つ迄もなく、強盜殺人罪として死刑にされる、所が之が他國との戰になると、なるべく多く人を殺し、なるだけ多く物品を強奪したものが、功勞者として金鷄勳章が貰へるのだ、一人を殺した人間が罪惡として死刑に價するならば、五人十人を殺した者は尙更重い刑に處せられなければ

ばならぬ筈だ、然るに帝國主義者は人を多く殺し、財物を多さんに強奪することを煽動する、吾々が戦争に反対する理由は茲にあるのだ。

吾々は日本人を愛するが故に支那人を愛する、支那人を愛するが故にロシア人も愛するのだ、自國民ばかり愛して他國民は如何なつても、カマワヌと云ふ考えは、自分さえよければ他人など如何なつてもよい、と云ふ資本主義が産んだ悪思想である。

二、空氣と日光

論旨は少し横道へそれたが、今日の地主が何時の時代に於て如何なる條件で譲り受けたにしても、元は盗んだものである、今日の法律では盜賊の贓品は返さねばならぬことになつて居る、何者かが此町なり村なりに現はれて、此町で朝から太陽の光線に温つたものは『日光料』として金拾圓を出せ、此村で半日空氣を吸つたものは『空氣料』として金五圓づゝ支拂ふべしと要求したら、讀者は此無法者に對して何と挨拶をするか、吾々は一分間も空氣なくしては生きることが出来ず、半時間たりとも日光なくして生きることが出来ぬ、此大切な空氣や日光は、吾々が此の世に生

れると同時に男子と女子の區別なく、小供と大人の區別なく、貧者と富者の區別なく平等に與へられた自然の賜である、今地主が獨占して居る土地も其の通りである、地球上に生れた世界十五億の人間は、此土地を利用して生存すると云ふことは、吾々が此世に生れたと同時に與へられた生存權である、此大切な生存權を、一部の地主によつて獨占されて居るとは何事であるか。

帽子や衣服のやうな或程度まで人の力で造ることの出来るものでも、これを個人が勝手に分配すると云ふことは不當であると云ふのが、社會問題の基調となつて居る、然るに土地は如何に偉いと云ふ實業家が、何億萬圓の資本金の會社を建て帝國大學を優等で卒業した技師が腦獎を絞つても——一尺の土地は愚か一寸の土地さへ造ることは出来ないのだ、地質學者の話に依ると地球は最初瓦斯體のドロドロのものが冷却するに従つて固つたので、今日の海は低い所へ水が溜つたのであり、山はその時出來たシワであると云ふことだ。

三、地球の年齢

地球の起源に就ては學者によつて其説を異にして居る、殊に地殻發生前の状態に關してはデカルトの渦流説を始めとし、スウエーデンブルグ、カントの説、ヘルジュルの霞雲説、ラブラス、プラネテシマル、ボアンカレー、ヒルケラント等異説紛々である。併し地球が地質時代に入る前所謂霞雲といふ状態にあつた時代を経て來たであらうといふ説が、今日多くの人に信せられて居る。左に表はすものは斯くの如き貌として捉へ難き混沌時代を除き、既に地殻を生じたる以後文化的人類の發生する迄、この位年數を経たか、それを地質學的に調査したものを示すのである。

八千萬年(乃至八億萬年)前 (無生岩或は初生岩の時代
(即ち無生代或は初生代)) 生物未詳の時代。

六千萬年(乃至六億萬年)前

三千六百萬年(乃至三億六千萬年)前 (前生岩の時代(即ち前生代)) 小形な下等動物、水母、及び下等植物等の時代。

二千六百萬年(乃至二億六千萬年)前 (初期古生岩の時代(即ち初期古生代)) 海綿及び三葉蟲等の無脊椎動物の時代。

一千四百萬年(乃至一億四千萬年)前 (後期古生岩の時代(即ち後期古生代)) 魚類、兩棲類及び沼澤植物の時代。

四百萬年(乃至四千萬年)前 (中生岩の時代(即ち中生代)) 爬蟲の時代。

現

在 新生岩の時代(即ち新生代) 哺乳動物、人類、禾本科植物、陸上森林の時代。

此の表を見ると、どんなに地球の歴史の悠久なものであるかまたそれに對して、有史以來僅かに數千年をししか閱さぬ文化的人類の歴史の、どんなに短小なものであるかといふことが略ぼ推察できやう。尙ほ此の表に依つて、どんなに遅々として生物の進化發達が地球の表面の上で行はれて居たか、また、どんなに長い間地球は何等の生命をも搭せることなくして、徒爾に退屈な回轉を續けて居たかといふやうなことが想像できる。

地球上にある最古の岩石の年齢に就いて、地質學者と天文學者との間に、十六億年と二千五百萬年といふやうな大きな違ひがある。物理學者のロード・ケルヴィンは、地球の年齢を二千萬年と四千萬年との間であるとした。同じく物理學者のサー・ジョーヂ・ダーウインは、月が地球を離れてから今まで、約五千六百萬年の月日が經つて

居るとした。次に、地質學者のゲーキーは、沈澱岩が現今の状態にまで沈澱堆積するには、一億年乃至四億年を要するとした。また、ジョリーは、海中に於ける鹽分の含量から計算して、海洋の年齢を九千萬年から一億年の間であるとした。更に、ソラスは、同じ點から出發して、海の年齢を八千萬年乃至一億五千萬年であるとした。

之等の數字を見ても、此の問題がいかに概括的な動搖性のものであるかといふことが推察できる。だゞ吾々が確に云ひ得るのは、地球の年齢は、吾々短い壽命を持つた人間の眼から見ると恐ろしく長いものであつて、何千萬年、何億萬年といふ様な大きな數で、數ふべきものである。

四、獨占の不當

しかしながら、各時代相互間の比較的の年數關係は大凡一定して居るから、若し前表中の八億年を二分して四億年とするならば、それと同時に、新生代初期の年數四千萬年をも二分して二千萬年としなければならぬ。全體の總年數は如何であらうとも、生物界が後期古生代の状態まで進化するには、地球は既にその年

齡の半分、或はそれ以上を經過して居たといふ點に付いて、多くの地質學者の説が一致して居る。

俄に想像をするのも困難なやうな長い／＼の間、地球は、熱い、生命の無い魂として空間に廻轉して居た。それからまた、その後も、同じ位の長い時の間、地球は、今吾々の家の附近の溝の中に見出すやうな、比較的に極く簡單な、平凡な生物界を擔つて動いて居た。嘗に空間の大部分が生命に就て空虚であるばかりでなく、時の大部分も亦生命に就て空虚である。生命は、之等の無限な空虚の中に微かに點された小さな一つの螢火のやうなものである。

地球は人間が棲む爲に出來た譯ではなく、地球のあつた所へ勝手に人間が湧いたので、云はゞ林檎に生えた蠍のやうなものである、人間の建築した家屋が地震でひっくり返り、その下敷になつて死んだからとて、大自然から見たら、道を通る車の下になつて死んだ蟻程のことでもない、誰の爲にと決つて出來たものでない土地を、「これは

己のものだ』と所有することの不當であるのは云ふ迄もない事だ。

都市の地代や家賃の高くなるのは、そこに鐵道や電車が敷かれ、電線や電話が通じて便利になつたからで何も地主の力ではない、此の電車や鐵道や電線や電話の布設には、市民や國民が税金によつて負擔して居る、それを地主獨りが利益を占めるのは何としても不當である。關東の大震災で昔の武藏野に遷つた東京では一時地代も下り、家賃も取れなかつたのではないか、土一升金一升の銀座も、共同の力に依れる花の都があつてのことだ。先頃或聞新を見たら、岡山縣の某地主と小作人の問答が出て居た。

小作人『もつと小作料を下げてください』

地主『此上小作料を下げては、私の方でやりきれぬ』

小作人『やりきれなけりや地主であることを止めたら如何です、そうすりやお互に喰へるやうになるのです』

それは本當だ、『豊葦原のみづほの國に生れ來て米の飯が喰へぬとは嘘のやうな話』

と讀んだ歌人があり、『一日耕さゞれば一日喰はず』といつた禪師がある。遊んで居て喰ふとする横着な地主があるから、働いても喰へぬ様な哀れな小作人が出来るのだ。

五、農村の荒廢

農村疲弊の事實を、最もハッキリと證明するものは、我國の農家の負債額である。大藏省の調査した所によれば、大正二年迄に我國の農家の負ふた借金の總高は、約九億四千萬圓に達して居る。その後の事は明かでないが、從來の例から推せば、借金は増すとも減つて居ないに相違ないのである。そこで日本現在の農家約五百六十萬戸を以て右借金高を割つて平均を出して見ると、大凡百八十圓となる。高岡農學博士の調査によれば、明治二十年までに、我が農家は既に二億三千三百萬圓の借金をして居る。而して明治二十八年より三十一年までに於て、更に其上一億五千六百萬圓を増し、三十二年より四十一年までの間に於て、又々三億二千萬圓を増加して居る。四十一年後は毎年約三千五百萬圓位づゝの割合を以て増加して來た。今、農家は、地主、自作農、自作兼小作農、小作農の四種類に分け、各階級の借金高を調べて見ると、

階級別	負債別
地主	二、二二四、二〇〇
自作農	四五六、一四〇、八二六
自作兼小作農	四一一、九八〇、六九五
小作農	七二、〇〇九、四一四
合計	九四二、二五五、一三七

右の表によつて見れば、借金の最も少いのは地主階級である。これは當然なことで、地主にはおのづから生計に餘裕あり、且つ小作人の働いたものを搾つて生活するので、自分で手を下して仕事をするのでもないから、格別資本もいらなわけである。併し乍ら自作農及び自作兼小作農は、自分自から働くのであるから、資本を要することも多く、且つ生中抵當物件を持つて居るから自然借金能力も多い理由である。従つて借金高も一番多いことになる。小作農に至つては、それこそ飲んで食つて通る丈けで、格別抵當に入れるやうな物件の持合せがない。そこで借金をしやうにも出来ないわけである。従つて借金高が比較的少い。

そこで負債の原因は何かといふ問題になる。勿論これにはいろいろの原因があるので原因如何によつては、借金決して恐ろしいものではない。要は、生産のための借金が、不生産的な借金かといふ點にある。今茲に農家の借金を百分率によつて表はしたものを示せば、

負債の種類	百分率
生計困難のため	三二、一
農業資金を得るため	三一、二
不測の災害のため	一五、六
舊債償還のため	一一、〇
土地買収のため	六、四
商業資金を得るため	三、七

右の表の中、農業資金を得るため、土地買収のため、商業資金を得るための三つのものは、これを生産的の目的のための借金と見ることが出来るやう。農業の元手、土地の買収は積極的に農業をやらうといふので、これが回収の途もおのづからあるであら

う。商業資金を得るための借金は農業一方では、到底一家の生計を支へ難いので、半農半商といふ工合に、農業片手に商賣をやらうといふ、その元手である。これなどは比較的償還の容易な方であらう。併し一體に農村に於て借金をするのは、野中の古井戸に陥ちたやうなもので、呼べど叫べど容易に抜けられるものではない。取りわけそれが、生計困難のため、不測の災害のための借金となつたら、殖える一方で、減らすといふことは殆んど望みがないのだ。舊債償還のための借金は、要するに借りかへをやるので、一時の急を凌ぐことが出来ても、根本的に整理し得る見當が中々つくものでない。然もこれらの原因による農家の負債が、よほどの高に上つて居るところを見れば、その生活の如何に苦しいかを察し得るのだ。

六、強慾な地主

歐米諸國の農家は比較的安い利子の借金をする便宜があるけれども、日本の農家には、殆んどこんな便宜はない。農工銀行などいふ設けはあるけれどもそれは手續が面倒なものと、銀行員の役人根性なものとで、自作農以下の階級の相談相手に

はならない。事實上地主のための金融機關といつてよい。甚しきに至つては、地主が口實を設けて農工銀行より低利の金を引出し、これを自作農以下のものに高利に廻してゐるといふ實例もある。何のことはない、農工銀行は、農村の高利貸の親銀行をつとめて居るわけになるのである。

そこで普通の場合に、農民が借金をするのは、土地の地主、金貸から借りるのである。それも無擔保では貸さないから、先祖傳來の田地などを抵當にして借りることになる。ところが金利が高い上に、農村にさうボロい儲けのあるではないから期限が來ても右から左に返済は出來ない。一度や二度は書替で濟すとしても、さうのつまりは二束三文に祖先以來の土地を手放す外はなくなるのである。強慾非道な地主に至つては、最初から土地を取るために金を貸しつけ、わざと期限に後れるやうに仕向け、結局法律の強制手段で土地を手に入れる者も、ところによつては随分ある。そこで金利はどの位になつてゐるかを見ると、

利率	負債額
一割以下	三〇六、九四九、二二四
一割以上	三三三、九九二、一〇三
一分以上	一一六、二六六、六四七
二割以上	三三、一四九、七七二

これは前述した九億四千二百萬圓の總負債中の七億八千九百三十五萬七千七百五十六圓丈けしか分つて居ないのであるが、それでもその金利の如何に高いものであるかは、思ひ半ばに過ぐるものがある。

七、私有の弊害

土地私有の弊害は、地價の騰貴を豫想して土地の賣惜みをなすといふ點にも充分現はれて居る。往々市内に廣大なる空地の存して居るのを見ることがあるが、これは確に其實例として見るべきではないかと考へる。東京市には今日も尙ほ、田、畑、山林、原野、池沼といふ名稱の下に三十五萬六千四百八十三坪の土地があり、其法定地價が僅に一萬四千三百五十八圓四十一錢であることを記憶せねばならぬ。

東京市内に一坪四錢の土地があると言は、何人も容易にこれを信じないであらう。然し上記の土地は平均四錢といふ法定地價を有して居るのだから、地主はこれに準じて輕少なる地租を納めて居る譯だ。斯る恩典に浴して居る地主が地價の騰貴を豫想して容易に其土地を手放さないのは無理もなきことである。米價騰貴の際に農夫が米の賣惜みをしたり、米商が買占めをなす場合政府は可なり嚴重な取締りをなすに拘はらず、土地の賣惜みや買占に就て殆んど無關心で居るのは大なる矛盾ではないかと思ふ。投機の目的を以て空地のまゝに放任することを許したり、市内に於て田畑や山林の存在を認めるといふことが間違つて居る。實際の賣買價を標準として地價の修正を行ふとか、空地に對しては稅率を高くするとかいふ政策を取れば、或程度まで土地投機熱の弊害を防止することが出来る。

然し政府當局者や市會議員が、公平に地價修正を行ひ得るや否やは、大なる疑問であると言はねばならぬ。法定地價と實際の賣買價の間に少からぬ差異のあることは、

都市も農村も同様であるが、殊に都市に於て甚しい。東京市の有租地は約千三百萬坪であつて、これに對する法定地價は約一億圓であるけれども、先年東京市顧問として來朝したヒヤート博士は次のような計算をして居る。大正九年度に於ける東京市の平均賃貸價格坪當りは一ヶ月四十八錢五厘即ち一年坪當り五圓八十二錢であつた。此數字は同年中の土地賣買全部即ち千三百七十七件に就き詳細なる研究をなした後に得たものである。東京市の金利を一割と見て還算すれば、有租地千三百七萬三千二百二十二坪の時價は九億五千七百六千九百五十錢といふことになる。即ち法定時價の約九倍半である。法定地價と時價との間に、此の如き差異の存在することを許して置くといふのは、當局者の怠慢といふよりも寧ろ罪惡といふのが適當ではないかと思ふ。今日尙ほ三十五萬六千坪の田畑山林以下の土地を坪當り四錢と評價して居るが如きは全く沙汰の限りである。

當局者が上記の如き不都合を默許して居るのは何故であるかといふに、これは全く

彼等が地主に對する遠慮であると言ふの他はない。大地主は概して貴族にあらざれば大富豪である。當局者が地主の脱税を見て見ぬ振りをして居るのも、或は地價修正に手を觸れることの出来ないのも、要するに地主の威力が如何に大なるかを示す所の證據に過ぎないのである。此點から考へても土地の國有は當然斷行すべきものであるといふことが了解される。土地の私有を許すがために大地主なる階級が現はれ、遂に一國の政治をも左右することになるのだから、社會安泰を謀るためには、地主階級なるものを廢止し、此目的を達するためには、先づ土地の國有を斷行しなければならぬ。

(3) 地球及人類の創成 (5) 農村問題講話 (7) 土地國有論

第三編 人類の發生と賤民

一、穢多の虐殺

今頃『私の先祖は何々の守だ』とか、『何氏の末孫だ』とか言つてさも自分だけが上等の人間のやうに、家柄とか系圖とか言ふ愚にも附かぬことを自慢する馬鹿者がある、こんな奴に限つて穢多は横腹の骨が一本足らぬとか、變な臭がするとか云つて排斥するのだ。

昔の穢多の社會的地位は實に凄慘の極みであつた。元祿八年に生類憐みの令と云ふ愚令が出た、天和三年の下人召使の雇期限を十ヶ年と定むる法令、元祿十二年の譜代召抱を禁ずる令これ等は自由民の奴隸化するを救ふ法令であつた。而も部落民の慘憺たる地位を救ひ、これを生かす一片の法令すらも發布されなかつた。否、元祿の頃の書には穢多は『不能_レ窺_三神明高貴之底_二』とある。元祿十年の阿波藩取締令には百姓と服裝を違ふ可きことを定めてある。衣食住への干涉が法制の上にも現れて來たのである。

ある。

穢多壓迫の魔手は徳川後期に至つて益々延びた。徳川幕府の差別的階級政策は、專制に阿諛屈從せる愚鈍の民に、穢多賤視の觀念を強く殖ゑつけた。普通民より通婚、同居、同火を許されぬ夜間は城下に入ることを禁せられ、他の家に入るには草履を禁せられ、門の傍なる犬の潜穴より出入させられた。頭髮を普通民と區別するため二重元結とせねばならぬ。女子は普通民の如く帯を結ぶを許されぬ。普通民は言葉を交すを忌み屋内に入れず、冠り物を禁じ、雨の路にも下駄を許されなかつた。往來に窓を開くことを咎められたこともある。支配階級に屈服させられた民衆が孤立せる穢多に驕慢無法の態度を取つたのは哀しき悲喜劇ではあるまいか。

正徳の頃からは戸籍をも普通民と區別した。非人の斬髮、冠り物嚴禁を行ひ、百姓町人體に紛らすものは厳しい仕置に處せられた穢多に對する一般社會、なかにも武士階級の横暴は言語に絶し、武士の利益の前に力無き穢多の首がぐれ丈打ち落されたか

知れなかつた。身分を隠して一般民に紛れ込んだり、縁組したりして發覺すれば處刑は嚴重であつた。幕府の令には『この頃國々在々の穢多ども増長し風儀よろしからず町人百姓とまぎらはしき服装をするふらちの段』の句がある。

非人に對しても取締は厳しく物品の施與の強別は堅く禁せられた。非人斬髮の制が稍んだとき髻を切り之を束ねるを禁じた。小屋に天井を張り普通民と交際して處刑された話もある。何時の時代も刑罰は社會の下層階級に對してのみ重い。普通民が部落民に對する犯罪を咎められず、部落民が普通民に對するときは嚴重處罰された事が多かつた、『穢多仕置』といふのがあつて部落民の犯罪は大概これによつて居た。

穢多非人に對する無法な壓迫の例として憤らざるを得ない話がある。安政六年、江戸は山谷眞崎稻荷の初午の日である。場末の穢多が一人參詣のため稻荷の鳥居をくぐつた。山谷の無頼漢はこれを見附けて、

『穢多が神詣りに來た。汚れる汚れる』

と連呼し若者大勢を呼び集めて喧嘩を吹き掛けた。

『俺も人間だ。神詣りするに何の不思議がある。』ところが云ひも終らぬうちに、

『畜生だ！殺して了へ！』と叫びながら寄つてたかつて袋叩にして遂に殺してしまつたこれを聞いた部落のものは羨えかへるような痛憤を感じた。彈左衛門は下手人の處刑を北町奉行に願ひ出た。奉行池田播磨守は、

『穢多の身分は平民の七分の一に相當する。穢多七人を殺すに非ざれば町人一人の下手人を出すことは出來ぬ。』

彈左衛門は抗辯したが駄目であつた。

『一人の下手人が欲しくば、あと六人殺して來い！』これが最後の判決であつた。彈左衛門は涙を呑んで黙した。部落の民も沈黙を守つた。而も當時の江戸の民は之を『名裁判』として賞め稱へたそうだ。

二、尻尾の跡

特殊部落の問題は水平社等色々の團體が出來て盛に運動もして居

り、此方面の學者も『穢多は昔戦争に敗れた者が落人となり、町端や村端で人の嫌がる皮商買をして渡世をしたが爲め、段々世間から別物扱にされるやうになつたのである』など、云つて居るが、モット原因に遡つて、人間は何から生れて來たかと言ふことを研究したいと思ふ。筆者が朽木縣の宇都宮で、『人間は猿から進化したものだ』と云ふ演説をしたら、六十ばかりの老人が、『吾々は神代時代からの大和民族である』とか何とか云つて怒つて出て行つた。私の言ふ人類の歴史は、何十萬年の昔、人間がまだ單細胞であつた時代からのことで、よい加減にこねあげた二千五百年や六百年位の日本の歴史とは比較にはならない。人間の先祖は猿だと云つた所で、之は私の駄ボラでなく、進化論の創唱者デアキンの説を例に引いたまでである。道學者よ！人間が墮落したなんて憂ふることはない。下等な動物が茲迄進化したのだから、前途大に發達の望はある。

生物學者の學說に依ると、地球上の最初の生物は水草であつて、其下へボウフラ見

たやうなアメバーと云ふ單細胞動物が出來た、それが進化して魚類となり、更に蛙や蛇のやうな兩性動物となり、一方は鳥に別れ、他方は馬や牛のやうな哺乳動物となり普通の猿から類人猿——人間と進化したものだと言ふことである、現に吾々の尻の所を押すと堅い骨がある。之は吾々が四つ足であつた時の尾の跡だと云ふことだ。今は進化して皮の下になつて居るから判らないが、解剖すると他の動物の尾の跡と少しも異りはない。其の他骨組でも人間と猿と比較すると、文明人と野蠻人との間よりも、野蠻人と猿との間の方が遙に近いと云はれて居る、妊娠中の胎兒を見ても、それが六ヶ月となり八ヶ月となれば、猿と人間の子の區別は判るが最初の中は何れにも尾もあれば毛も生へて居るので、何れが豚の子か犬の子か人間の兒か吾々のやうな素人が見たのでは判らぬ。

三、有力な證據

血液は無色透明なる血漿と其中に浮んで居る無數の血球とから成つて居る。人類其他の獸類から新鮮な血液を取り、之れを凝固させると其表面に浸出

する血清が得られる人類から得た血清を兎に注射し、二三日を経て再び注射を施し、斯くの如くすること凡そ八九回に及ぶ時は、其兎を殺し其血液から血清を取り、之れに注射を施さない兎の血清に比すると、甚だしく異つて居る。今此注射によつて得た血清を、人類の血清に混すると忽ち劇しい濁濁を生ずる。けれど之れを普通の犬の血清に混しても、何等の現象も起らない。

前述の方法によつて、牛兎血清、馬兎血清、犬兎血清等を作り、之れを種々に混合すると、牛兎血清は牛の血清に合つて初めて濁濁し、馬兎血清は馬の血清に犬兎血清は犬の血清に合つて沈澱を生ずる。而るに馬兎血清は馬以外他の動物の血清と合するか、何等の沈澱を生じない。そして馬は驢馬、牛は山羊、犬は狼等の血清に代へると、稍弱き濁濁を生じる牛と山羊、馬と驢馬、犬と狼とは共に相似たる所があるもので、或る學者が五百餘種の動物と、人間と兎との血清と、猿兎血清四十六種とを作り、之を人兎血清と混じたら、猿以外の動物は如何な動物をとつても何等の沈澱を見ること

なく、又猿類中でも高等猿類と稱する猩々の如きは、其沈澱著しく生じ漸次下等に至るに従ひ、其度を減するを見たといふことである。此實驗を見る時は人類と猿類との關係は、馬と驢馬、犬と狼との關係と同じく、同屬に屬することを示すもので、従つて人類と猿類との間には子を成すことの出来ることを示すものである。尙一步を進めて云へば人類と猿類とは、同一の祖先から降つたと云ふことが判る。

ストラウフは猩々の死體から其血清を取り、之れによつて血清を作り、食鹽水を加へて六千倍から一萬二千倍に稀薄し、之れに十パーセントの割合を以つて人兎血清を加へたら、三十分の後に至り漸次濁を生じた。又馬、羊、ホロホロ鳥、大猩猩、人類の血清の百倍液を製し各九立方センチメートルに〇、一立方センチメートルの人兎血清を加へたら、前四者の動物の血清に對しては何等の變化を見なかつたが、後二者即ち猩猩と人類に對しては著しい濁を生じたのである。

之等の事實によつて見ても、最早や人間は下等な動物から漸次に進化して來たもの

であるといふことは否定する餘地はない。

四、人類の進化

人類の起原に關しては、古來學説が甚だ多い。記録もなく、實際を觀察したこともないことを、唯僅な材料によつて推測するが爲の結果である。この千差萬別、參差糾紛した學説を一括して別つ時は、創造説と進化説の二とすることが出来る。

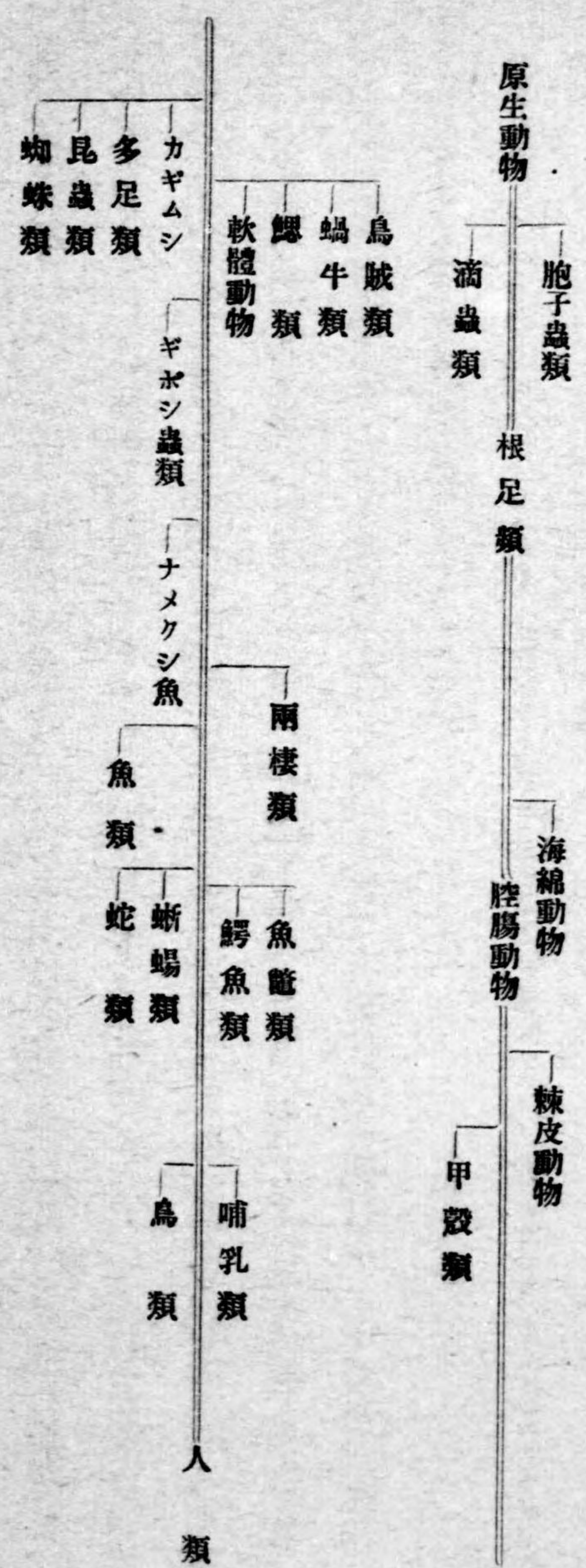
創造論者は生物が昔から今日に至る迄、種々形態を變化し改善し來つたことは、決して進化の如き理によつて左右せられたものではなく。神が屢々之れを改造したものであるとし、人類の如き高等な生活體が下等な動物から進化して來たといふやうなことは、殆ど之れを夢想だにすることも出来ないといつて居る。即ちキュビエーの如きは、地上の開闢は屢々行はれ約十四五回の改造があつたと、所謂天變地異を説いて居る。是れ地上幾多の變遷につれ、神は其變化に適應する模型によつて種々の動物を作つたが其歸する所の目的は此地上に人類を生せしめんが爲の準備で、當初太古の魚類

から屢々造られたあらゆる動物創造の業は、悉く神が人類創造の目的から打算された結果であると云ふ一種の神秘説である。此説は科學未だ開けず宗教人心を支配し、迷信意識の全面を包被せる時代にあつては、最も有力な説で、又事實を説明するに困難少なく、且つ最も無事な説であつたけれど學業日に進み、漸く文化の光明を見るに至り、斯かる奇怪な説明では到底満足を與へることが出来なくなり、茲に眞理を明にし確實な基礎の上に立つて解決を試みやうとするに至つた。是れ即ち進化説である。

進化説を初めて唱へたのはラーマクであるが、之を一定不易の原理として認めさせたのはダーウキンである。彼は總ての生物は刻一刻も止まず常に進化發達して、易は難に、單は複に、漸次進化するものであると云ひ、現今地上に棲んで居る幾十萬の生物も皆親から子に、子はまた孫に傳へ、其間絶えず進化して、遂に今日に至つたものだといつて居る。彼が一千八百九十五年十一月公刊した『種の起原』は此進化説を遺憾なく説いたもので、今日進化説が一般學者の間に稱へられるに至つたのも此書が出

た爲である。特に氏が未曾有の發見とも云ふべきは、其書中にも説いたやうに自然淘汰の一條である。ダーウエンは生物進化の理を説いたが、生物の起原は一原なるやまた多原なりやについては、何等説く所がないけれど生物が祖先から順次相傳へて進化して來たものとすれば、勢其一原たるを説かなければならぬ。

(左は生物進化の系圖)



五、人間の祖先

リンネーといふ學者が、初めて自然界を、礦物、植物、動物の三世界に分けた次に彼は此の各世界の中に於いて、有ゆる物體をそれらに分類して排列した。斯くて我々は初めて植物系統、動物系統の智識を得たのである。勿論、リンネーの分類排列にはまだ多く多くの缺點があつたけれども、兎にかく我々はそれに依つて、動植物の各種を比較し研究するの基礎を得て其の各種の間に於ける自然の關係をも發見する希望を得たのである。

然るに、リンネーが此の大切な種屬の分類を爲すに當つて、自づから『人間を何處に置くべきか』といふ問題に到着した。彼は何んの躊躇もなく、人間を其の身體の構造上から見て動物界に屬せしめた。殊に動物界の中に於いても、之を哺乳動物に屬せしめ、更に細かに分類して之を猿猴類に屬せしめた。今日と雖も、人間を如何なる分類に置くかと云へば、矢張り是より外に考へ様はない。

人間は固より礦物では無い。人間は生物である人間は何か食はねば死んでしまふ。

食物を取らねば死ぬると云ふのが總ての生物の此の世に存在する定法であるが、人間も即ちそれで生物として存在して居るのである。それから人間の腕をつねれば必ず痛い云ふ。是は即ち感じがあるので、此の感ずる力を有する者には必ず「生命」が存すると云ふ事になつて居る。次に人間の食物には定めがある。人間は純粹の礦物を食ふ事が出来ぬ。必ず植物質か動物質かを要する。即ち石を食はずしてパンを食ふ。そして空氣の中からは只だ酸素ばかりを取る。是では何うしても、土を食物とする植物界からは區別して、動物界に屬せしめるより外は無い。

然るに、動物界にも又二大別がある。當時リンネーはまだ此の區別を知らずに居たが、我々は其後に之を學んだ。即ち其の二大別とは、單細胞動物と多細胞動物とである。單細胞動物とは、細胞と稱する動物質の只一個から成る者で、蠢々蠕々たる微細の劣等動物である。多細胞動物とは、多數の細胞から成る者で、其の多數の細胞は各々分業を營んで、身體各部の組織を爲して居る、扱、人間は云ふ迄もなく此の細胞の

幾千萬個から成る者で、或る細胞は筋肉となり、或る細胞は血液となり、或る細胞は皮膚となり、或る細胞は骨となつて居るされば人間は明かに多細胞動物に屬する者である。人間は決して顯微鏡で見える様な、微細な、劣等な單細胞動物ではない。

六、猿の同族

多細胞動物の中にも又種々の區別がある。人は其の何れに屬するか先づ海綿がある。珊瑚がある、水母がある、蠕蟲類がある、人手がある、雲丹がある甲蟲類がある、昆蟲がある、蝸牛がある、貝類がある、そして最後に脊椎動物がある。此の脊椎動物と稱する一群は、消化器管と相並んで脊髄を有し、之を保護する脊椎骨があつて、それが身軸となつて居る。人間も亦た脊髄を有し、脊髄骨を有して居るので、一見して脊椎動物に屬する事は明かである。

此の脊椎動物の中に於いて、先づ魚といふ一種類がある。魚は肺を以て呼吸せず、腮を以て水中に呼吸する、人間は肺で呼吸するから魚ではない。次に蝶鰻だの、蛙だの、様な兩生類がある。是は腮で呼吸したり肺で呼吸したりする。例へば蛙の如き、

お玉杓子の時には腮で呼吸し、後になつて漸く肺が出来る。人間はそんな風に二通りの呼吸をする事は出来ぬ。故に人間は兩生類ではない、次に又爬虫類即ち蛇、蜥蜴、鱉、龜などがある。此の類の動物は、氣候に依つて其の血液が暖かくなつたり冷たくなつたりする。即ち寒い空気を吸ふ時には血が冷たくて、日に照されて居る時には血が暖かい。彼等は自分で熱を發する力を有して居らぬ。人間の體は自ら熱を發する者で如何なる時でも暖かい。故に人間は爬虫類ではない。また外に二種類の脊椎動物があるが、それは皆な何時でも暖かい。それは即ち鳥類と哺乳類とである。人間は此の何れに屬するか。鳥類には子に乳を飲ませる者はないが、人間はそれをする。總ての哺乳動物は皆それをする、故に人間は哺乳動物に屬する。

然るに、此の哺乳動物に又二大別がある。一方は濠洲の鴨嘴の如く卵を生む者で一方は卵でなく今少し發達した子を産む者である。

人間は卵を産まぬから鴨嘴の類ではなく、一層高等の動物である。所でいよ／＼此の高等動物の中に於いて最後の決定をせねばならぬ事になつた。先づ人間の手と齒とを見よ。人間は決して鯨類ではない。鯨の手は鳍に變じて居る。人間は又蹄のある有蹄類でもなく、前齒の鋭い齧齒類でもなく、齒の全く無くなつた樹獺の類でもなく、兩手が翼に變じた蝙蝠類でもない。斯く見來れば、手と齒との最も人間に似た哺乳動物は只だ一種を残すのみで、それは外でもない、即ち猿猴類である。

人間の先祖は同一の猿から進化したものであるとしたら、貴族と平民との區別がある筈もなく、従つて平民と新平民との區別は尙更ない筈である、穢多は人相が悪いとか臭がするとか言ふのは、結果であつて原因ではない、人は境遇に養はれ易いものだから、充分人相の悪い人でも生活が樂になると福々しくなつたり、品のよい華族の若様でも貧乏をすると『貧すりや鈍する』で、見違へるやうに人相が悪くなる者である米騒動の時も慘忍の行爲をしたものは、多く特殊部落の人であつた。彼等は平常世間

から、虐げられて居るから、何か機会があつたら、復讐してやろうと思ふて居る、そのうした反逆心が、斯る時に爆發するのだ、今の中にこんな階級思想を打ち破つて置かねど、將來の禍根は茲から破裂することを斷言するに憚らない。

七、黒人の私刑

日本の特殊民以外に穢多扱にされて居る者にユダヤ人と黒人とがある、殊にユダヤ人の祖先は、國なく、家なく、四十年間もアラビヤ沙漠を放浪したと云ふのだから、若し彼等に何處か變な所があるとするれば、永い間の迫害と虐殺に對する憤恨の一念か、遺傳の如く種族内にシメ込んだものであらう。

米國の黒人は何等の罪のない時に、週期的に私刑に處せられる。その理由は主として『婦人の凌辱』である。しかし黒人婦人も亦私刑に處せられるのである。最近、一人の妊娠せる黒人婦人が私刑に處せられ、その瞬間に胎兒が出生したのである。最近、一人の靴の踵をもつて、地上に匍ひ出でた赤兒の頭蓋骨を打ち砕いた。私刑が行はれると町や村全體がそれに參加する。見物人は近方の町や村から蝟集し中には自動車でやつ

來るものもある、そして私刑がすむと老若男女を問はずいづれも犠牲者の身體の一部を千切り取ることを快としてゐる。

黒人の私刑は米國文明の最も恐る可き罪惡である『そしてその主たる理由は『黒人の白人婦人凌辱』であるウイリヤム・グリフスの『クランスメン』又は『民族の生誕』と題する有名な活動映畫は、クー・クルツクス・克蘭主義を是認し、いかにも生々とした凌辱の光景を描いてゐる。而してその凌辱こそ疑ひもなく、アメリカに於けるクー・クルツクス・克蘭の復活を促したものである。ところで婦人凌辱とは私刑を行はんがための單なる口實に過ぎない。何となれば多くの實例は明らかに私刑は人種的嫌惡及び人種的偏見の露骨に現はれたものに過ぎぬことを示してゐるからである。『米國の恥』と云ふ見出で日誌に掲げられてゐる所によると、一九一八年から一九二一年の四年間に二十八名の黒人が米國の暴民のために火焙りの刑に處せられた。一八八九年から一九二二年の間に三千四百三十六人の黒人が私刑にされた。それに掲載されてゐる

理由によると、凌辱五七一、殺人一二八八、其他個人罪惡六一五、財産侵害三三三、雜件四五五、罪なくして私刑となつたもの一七六、その中婦人八五となつてゐる。然らば罪なくして私刑に處せられた者は、何の理由によつてゐるか。『白人の小供が自動車で通るのを道を開けなかつた!』『ノン・ハーチザン同盟の會員だから』『白人男子に振り向いて話しかけた!』と云ふのであるその日記によると、私刑を行つたものは罰せられてゐない。

尙朝鮮人、支那人、印度人、等に關する凌恥虐殺に就いて述たいことはあるか都合上他日に譲る。

(1)特殊部落史 (3)人と猿 (5)人類發生の跡

第四編 原始社會と婦人

一、家長は女

ノルエーの文豪イブセンと云ふ人の作に『人形の家』と云ふ戯曲がある、これは日本でも度々上演されたので有名になつて居る。

雲雀や栗鼠のやうに、法律家ヘルマから盲目的に愛されて居た無自覺なノラが、遂に人形の衣を脱いで、妻になることよりも、母になることよりも、先づ人間にならねばならぬと自覺し、遂に覺悟を決めて夫の家、即ち人形の家を出ると云ふのが荒節である。

『お前は人の妻であり、子供の母であると云ふことを忘れたのか?』と云ふヘルマアの間對し、ノラが

『よく存じて居ります、然し私は人の妻となり、母となる前に、先づ人間とならなければなりません』と答えて居る。

これだけの會話の中にも、ノラが如何に、因習からの解放を叫び、人間として、從つて個人として、強い自覺に到達したか、判るのである、生れ出づる悩みとでも云はうか、彼女が總てを踏み越へて、新らしい生活に這入らうとして居る努力の跡が、實に悲惨に思はれる。

男は女に對し、『女は女らしくあれ』と云ふ、彼等の女らしくと云ふ事は、『人間としての女であれ』と云ふことではない、無條件で男子の肉浦團になれと云ふことである若し女が、母となる前に人間になつたら、それこそ彼等の破滅だ、彼等が過去何千年かの永い間、女を器物扱にした我儘が出来ないことになる、それだから少しでも醒めかける婦人が出来る、之を非難したり妨害したりするのだ、女に貞操を強いながら自分は守らず、己は妾を置きながら、妻に情人が出来ると姦通罪として告訴する、女がして悪いことなら男だつて悪い、男がして差支ないことなら同じ人間である女もよいではないか、然るに女ばかり罰するとは何事である、如何に男は威張つても、男の

産んだ男はないのだ、浪花節の文句ぢやないか、釋迦も、孔子も、キリストも皆女が産んだのである、兒を産むと云ふことに對しては、男は單に原料を提供したに過ぎない、生産に於て労働者が、資本家よりも大なる役目を果して居ると同じく、原料を提供した男よりも、妊娠してから十ヶ月、苦痛を忍んで、生活過程を全うした女の方が、人間として社會の爲め、立派な仕事をしたものである、今の法律、今の道徳は、大部分男子を中心として造られたものだ、男には大變都合はよいが、女に取つて此位不都合なことはない。

今日の婦人が、精神的にも肉體的にも男子より劣つて居るのは、後になつてから出来た相違で、元からではない、原始時代には女は家長をして居たことも事實であり、男子より優れて居たことも、多くの人類學者の證明して居る所である、女性中心説に依ると峯丸は最初女が兼用して居たもので、それが分裂して發達したものが男だと云はれて居る。

總て生物は種族の發達上、異質混和が有効である所から、自然淘汰の結果として交精作用が生じて來た。交精作用は最初一個體に附隨せる生殖機關に依つて行はれた。即ち女性が自ら男性機關を兼有して居たので、之を自家受精若しくは雌雄同體と言ふ。然るに其後、此機關は母體を脱出して獨立したが、恰も母體に寄生して居るかの觀があつた、母體は之を特別に造つた囊に入れて運んで歩いた。つまり其時分は、辜丸が男性の全部であつたので、丁度我々が信玄袋でも提げる様に女性は之を携へて歩いた。其後此辜丸は益々獨立して、母體と接觸も一定の時期を限つて行ふ様になつた。要するに男性の初は母體即ち女性から脱出した辜丸に過ぎない。女性は其より以後、人間に至るまで依然として元の儘の母體であつたが、辜丸は更に種々なる變化發達を遂げて、遂に一人前の男性たるに至つたのである。

現にアメリカ印度人やアフリカの蠻人の家長は今でも女だ、それが今日正反對の結果になつたのは、永い間男に壓迫されたと云ふ、悲惨な哀史を語るものである。

二、亂婚時代

米國の人類學者リ、ウィス・モルガンは、久しく北米のイロクア印度人の間に棲んで、其の風俗習慣の詳細なる研究を遂げ、其等の事實を基礎として、太古の社會狀態に對する推究を試みたのであつた。

彼に依れば歴史以前の社會は、蒙昧、野蠻の二大時期に劃せられ、更にその各々は上、中、下の三時期に細別せられる。

蒙昧時代の上期は、人類の幼稚期から魚類の捕獲、及び火の利用を知るに至つた迄である。此頃の人間は木の實草の葉を食して居た。言葉もこの時代から始まつた。

中期は火の利用と魚類貝類を食用に供し始め、且つ粗造の石器を作るに至つた時代である。

下期は弓矢の發明に始まり、狩獵が行はれ、村落生活の起つた時代である。

次に野蠻時代の上期は陶器の發明に始まり、中期は東半球に於ては牧畜、西半球に於て玉蜀黍の栽培及び煉瓦の製造を以て始まり、下期は鐵器の發明を以て特徴として

居る。

最後に文明時代は文字の發明に始まつて今日に及ぶものである。

溯つて太古の状態を想像するに、恐らく最初の人類は群ホムドの内部に於て亂婚を行つて居たが、稍や後世に至つて、先づ親子間の性交が禁せられ、次で同母の兄弟姉妹の性交が禁せられ、更に母系の叔姪其他の近親結婚が禁せらるゝに至つたものであらう。母系家族を基礎とする血族共產團體、即ち『氏』(ジェンス)はかくして成立するに至つたのである。

この氏の組織と、これが最初の社會生活の單位たる點とは、希臘、羅馬、獨逸其他各國の古代史に共通の事實である。そして今日全世界に散在する母系種族も亦、總てこの制度に則つて居るのである。

人間社會の進歩が、常に自然力の征服利用に伴ふことは云ふまでも無い。随つて生産方法の上に新なる發明發見の加へられる毎に、社會はその面目を一新し、男女關係

の如きも、それに伴つて變遷を重ねて來たのである。

モルガンに依れば、人間社會は今日までに、男女關係の五形式を経て來たものである。第一は亂婚に次ぐ血族群制、即ち兄弟と姉妹とが自然に一群の夫婦を成した時代勿論各個にとつて夫や妻が一定して居る譯ではなく、總ての男子は同時に總ての女子を妻とし、總ての女子も同時に總ての男子を夫としたのである。

第二は半血族群婚制、即ち同母の兄弟姉妹ならざる一群の兄弟と他の一群の姉妹との團體的結婚。

第三は偶婚又は一時的な一夫一婦制。即ち一男一女の結合ではあるが、その離合が極めて自由且つ容易である。母系制度の下に於ける男女結合の様式はこれである。

第四は一夫多婚制。これは母系制度に代る父家長制に伴隨する。即ち男權確立の結果である。

第五は、今日最も一般的に行はれて居る一夫一婦制である。

亂婚及び群婚の制度は、今日地球上に殆ど其跡を斷つて居る。然し未開人種の間には、多少その俤を存して居る所もあり、又最近までその行はれて居た明白な形跡のある所もある。更に亦、各國の歴史や、現在邊鄙な地方に残存する一時的性交無制限の風などは、その遺習と見ることが出来る。

是等の風習に引換へて、偶婚制は、今尙ほ世界各地に散在する母系種族の中に廣く行はれて居る。この制度は、野蠻時代の下期あたりに起つて、中期の頂に、恐らくは數千年を経て、徐々に衰滅に歸したものと推測される。

三、母系の滅亡

母系制より父系制への推移は、勿論一時に、急激に爲されたものではなく、久しい年月を要して、各々の地方や民族の特異の事情に依て、多少趣を異にしつゝ、徐々に遂行されたものである。そしてその過渡期に於ける新舊二勢力の葛藤は、神話、古代史及び現存の原始民族の風俗習慣の間に窺はれる。

女權覆滅の結果としての女子の商品化は、今日に至るまで、世界に普き賣買結婚の

風習となつて現はれた。

男子はその經濟力の發達に伴れて、女子の下位に就くことに甘んじなくなり、自己の意志に従順なる婦人を望む結果、彼等は屢々他種族から掠奪して來た女奴隸を妻とした。然し女子の掠奪は容易でないのみか、その女子の屬した種族との喧嘩乃至戰爭を惹起することも少くないので、この方法は廣く行はるゝに至らなかつた。そこで母系制結婚の束縛を免れる他の方法として、妻を贖ふの風が生じた。斯うすれば妻はその血族と斷つて夫の所有品となり、隨つて夫の意思に服従するの外ないのである。

母系的結婚と賣買結婚との二種の結婚法を同時に採り、依てその過渡の状態を示して居る種族も少くない。ホワイト・ナイル地方のハッサニア・アラビア人の間に行はれて居る部分的結婚の如きはそれである。これは、妻が一定の期間だけ夫の主權を認め、奇習である。花嫁と花婿との双方の親が結婚前に會合して、娘の代價を取り極める。その代價は、一週の中、夫の主權を認むべき日數の多少に依て決するので、親達は夫

聲でわめき合ひながら互に値切り合ひをする。結局一週幾日かの貞操デーが決定されるが、それ以外の日は、花嫁は全く自由行動を許されるのである。

スマトラには二種の結婚法があり、一方は純粹の母系結婚であるが、一方は夫が妻を全然財産として買い受けるのである。夫が妻の身代金を全部拂ひ渡せば、妻は絶対に夫の奴隷となるが、その大部分が拂へなければ、夫が妻の一家の奴隷として服役する、セイロンにも二種の結婚法があり、一方に依れば妻はその實家、又は實家の近傍に住居して、兄弟の遺産を受け継ぐ権利をもつて居るが、他の一方に依れば、妻は夫の村に移り住み、實家に於ける一切の権利を喪失することとなる。

ミヤイア・ハイランドのマヤオ、マンガジャ等の種族の中では、男子は結婚後、妻の許に移り住む習慣ではあるが、賠償金を拂つた時には、妻を自家に引取ることが出来る。

ザムベシのバニヤイ族では、父親は家畜と引換に子供を受取ることが出来る、これ

が支拂へなければ、子供は母方に屬する。

亞弗利加のバヴィア族では、母親はその子を入質する権利をもつて居るが、前以て父親に相談することが必要となつて居る。アイヴリー海岸のアラディア人の中でも、母は子を入質することが出来るが、父はこれを受出す権利をもつて居る。是等は珍らしいくない風習で、父権承認の第一歩と認められる。

いかなる形にもせよ、妻に對して身代金が拂はれる所には、女權衰微の兆が明かである。婦人は斯くて男子の所有品となつてしまふのである。要するに妻及び子に對する男子の主權が、全く賣買に依て確立されたものだといふことは、無數の事實に依て動かざる證明を與へられて居る。即ち男性の勝利は、決してその肉體的優越の結果ではなくて、一に經濟的優越の結果に外ならない。そして女子が一旦自己の性を賣買することを肯んじた刹那から、自由と獨立との光榮ある過去の歴史は、一轉して墮落と屈從との暗黒な道を辿らねばならなくなり、婦人の人種喪失、即ちその征復が成就さ

れたのである。

現在のやうな混沌時代に於て男女の優劣を定めやうとするのは早計である、女の多くは蹇でなければ跛である、蹇や跛にして置きながら『汝歩行困難故歩くべからず』と云ふのが男子の云ひ分である、一朝足腰が立つた時に、如何に見事な歩行振りをするか、それを見届けた後でなければ、男女の優劣問題は決定出来ない筈だ。

四、根本は經濟

女子が如何したら、母となる前に人になれるか？、遠い將來の事を考へたり、細かい條件を持ち出したりしたら、數限りのない程あるが、其内の要點を擧げるならば、何と云つても、先決問題は『生活と戀愛』だ。道德や法律はこれ等のものを遂行する爲めの手段に過ぎない。

一、女も男同様、代議士や市會議員を選擧することが出来ると同時に、ならうと思へば代議士にも市會議員にもなれる資格を持つこと。

二、女だから賃金が安いとか月給が安いと云ふやうなことがなく、男子同様の待遇

を受けること。

三、結婚は當事者の意志によらねばならぬ、親や兄弟に進められても、自分の氣にいらぬ人とは、斷じて結婚せぬこと。

こんな大それたことを云ふたら、定めて舊式の男は目を廻すだらう、然し人間としての女が、男同様代議士になつてナゼ悪いのだ、女も税金を納めて居る、殊に間接税などは、喰物の内から取られるのだから、財産の有無を問はず、子供でも女でも生て居る者は悉く取られるのだ。

女は男のやうに働けないから賃金の安いのは當然だと云ふが、人間としての務の上から見れば、男が山へ行つて木を切るのも、女が川端で茶碗を一つ洗ふのも、同じ尊い労働だ、人間は生れると同時に生て行く権利はあり、それぞれの天性に基づいて働くことになつて居る、一方が偉くて一方が價値がないとか、甲は貴くて乙は賤しいと言ふ様なことは、皆後から附た理屈で、到底問題にならない。

結婚にした所でそうだ、戀愛は自由でなければならぬと言ふと、例の國粹保存論者は野合だとか何だとか言ふて反對するが『君は生れてから死ぬまでの間に、一人の男若くは一人の女以外に關係したことはないか』と聞かれたら『然り』と答へ得るものは何人あるだらう、時には母の懷から妻の懷へ、母の懷から良人の懷へと言ふやうな人もあるが、それは百人の中に一人か二人の話だ、よしやあるにしても貴い戀の味合ひも知らず、再び來ない五十年の生涯を無意味に終るのだ。世間の多くの婦人は娼妓と同じだ、想思の戀人同志が夫婦になれば神聖な結婚であるが、大抵は古い習慣や儼の生た道徳に縛られ、爵位と爵位、金と金、名譽と名譽、地位と地位の結婚をやつてゐる、何某と結婚すれば伯爵夫人と言はれる、金満家の奥さんと呼ばれる、一生樂に暮される、美しい衣服が着られる、ダイヤの指輪が買へると云ふ政略上の結婚である眞の戀愛の爲に清い結婚をしてゐる人は、今の世に幾人あるだらう、人の妻になつたものは一生二人の男に賣り切り、藝者や娼妓や淫賣は必要に應じて幾人かの男に切賣

りするだけの相違だ。

最近婦人の爲にいろ／＼な意味の解放が叫ばれ、その地位の向上を現實化せんとする機運に向ひつつあることは、誠に結構なことであると共に、當然來るべき筈だつた現象でもある。婦人參政權獲得運動だとか、公娼廢止、公民權獲得等、その運動の種類は政治的に或ひは性的にと。諸種の方面に向けられてゐるが、何といつてもその根本は經濟問題に基礎をおかねばならぬ。自分の力で生活をなし得ざるもの、經濟的に男子に隸屬してゐるものが、如何に聲を大にして男子の前に權利をさげんだとて、所詮眞面目に相手になつてもらへるものではない。

五、悲惨な女工

資本制度は女工と云ふ女奴隸を生んだ。紡績工場の工場歌に『頭につもる埃こそ國をば富ます素因ぞや』と云ふのがある、この綿埃は同時に紡績女工自身の體を亡ぼす素因である、マッチ職工に燐中毒症があり、石炭礦夫や煙突掃除人に炭肺病があるやうに、染色職工に結核は、竹に虎、牡丹に唐獅子以上の付き物で

ある。

内閣統計年報に依れば、肺核死亡率の最も高い職業は彫刻(銅版、石版、木版等)印刷及寫眞業の一般死亡千に對し百四〇七人を筆頭とし綿糸、織物及編物等の製造業が之に次で三百十人と云ふ率を示してゐる。之れに反し一番少ないのは農業、牧畜、林業漁業で肺結核死亡数は總死亡数の僅か百分の八乃至九にしか過ぎない、右の内彫刻印刷寫眞業は比率は高くともその員数は少いが第二位にある綿糸、織物、編物は我國産の大宗だけに重要な意義を持つ、殊にその纖維工業に働く職工の半數が妙齡の子女たるに於て問題は愈々重要さを加へる。

一體工場在籍女工の死亡率は寄宿者女工が千人あれば毎年その内十人は死ぬるといふ割合である。併し之れは寄宿舎で、死ぬる女工だけの數で工場の死亡率としては病み出してから解雇または退職して歸郷した後死んだものをも加算せねばならぬ、石原博士の算定によれば斯うした發病歸郷後の死亡者が女工千人につき二十三人いふ。即ち

女工の死亡率は千人につき二十三人といふ、高率を示してゐるといはねばならぬ、これを一般の妙齡女子(十二才より卅五才まで)の人口千に對する死亡七人一分なるにくらべると女工は一般の女子に比し約三倍以上多く死ぬといふ勘定である。更にこれを實數で示すならば我國の染職工業に従事する女子約七十二萬人の千分の廿三即ち一萬六千五百人といふものが年々女工として死亡する數である、若しこれ等の女工が工場に働かず家にあつたとすればその死亡率はその三分の一約五千人で済むのである。

即ち兩者の差引、約一萬人は工場労働の眞の犠牲である我等が身に纏ふ衣服を作る爲に年々一萬のうら若い女の生命が亡びて行くのだ。然らば是等の女工の死亡者は如何なる病氣で死ぬるかといふに前述の如く結核が最も多い、まづ工場在籍女工に就て見ると總死亡千人中三百八十六人即ち四割は結核またはその疑ひのあるものである。

また病氣解雇歸郷者について見ると、歸郷後死亡千人中七百〇三人即ち七割は結核またはその疑ひあるものである、彼等は我慢の出来るだけ我慢して働き、遂にダメだ

と知るに及んで歸郷する爲に歸郷後の死亡は七割の多きに上るのである、女工の結核死亡率は後者をとるべきであらう、現に長野縣下の製糸女工の結核死亡統計は明らかに總死亡率の七割強を示して居るのである。次に然らば何ゆゑに纖維工業女子に斯くまで結核死亡者が多いかと云ふに常岡博士の説を引用すれば、その第一は女工の年齢關係であり、第二は工場の溫度及濕度關係であり、第三は夜業の影響であり、第四には衣食の關係である、一般に結核死亡者の多いのは十五才——廿才を筆頭とし——廿才廿五才、廿五才——卅才、十才——十五才の順序であるが、女工の大部分は右の第一位第二位の年齢の者である、長野縣の製糸女工八萬八千人中三萬四千人（三割八分）は十七才——廿才（結核死亡の第一位に該當する）であり一萬七千人（二割二分）は廿才——廿五才（同上第二位に該當する）五千九百人（六分三厘）は廿五才——卅才（同上第三位）で結核死亡率のより高い年齢女工がより多く居る勘定である。

第二の原因については言ふまでもない第三の夜業の害に至つては既にワットン協約

に之が禁止を規定した事でも判る筈である。

先年農商務省が連續徹夜業と體重關係を調査した處によれば夜業七日後體重減量は百七十匁で、その後は晝業七日後に歸つてその間に恢復する量は僅か七十九匁、差引百一匁は遂に恢復しない、此の調子で一年間一週置きに夜業をすれば一年後の減量は廿六貫目となつて十二貫に足らぬ女工の身體は消失して尙マイナスを見る譯である。

斯くの如き過勞よりする減量に乗じて結核其の他の病魔はその弱い女の體軀を抱くのである。

彼女がかしこくてキュービットの毒矢から免れても、ダム／＼以上の毒を持つ病魔の放つ矢からは遂に免れる事が出来難い、かひこと同じ運命にたふれる一萬の可憐なる犠牲と結核菌の毒矢に面接して働きつゝある、七十萬の女工の存する事を世人は果して如何に見て居るか。

吾々は此の工場主の犠牲となる可憐な女工の救済に躍進しなくてはならぬ。

(2) 婦人の勝利 (5) 著書不明

第五編 封建時代と民衆

一、貧乏人税

政府と人民の關係は、組合と組合員の關係でなければならぬ、組合は組合員の爲めの組合で、組合の爲めの組合ではない、故に組合の幹部に不都合があつたり、組合の規則に都合の悪いことがあつたりしたら、之に異議を申し立てるのは當然である、國家と國民の關係も其の通りで、政府あつての國民でなく、國民あつての政府である、然るに現在の國家と國民との關係は、居候と主人との關係のやうになつて居る、それは政府の役人が、政府と云ふものは昔からあつたもので、吾々國民が後から同居して來たやうに考へ違ひをして居るらしい、ドンナ貧乏人でも國家の一員として、納税の義務を負担して居るのだ、その國民様を居候扱ひとは何事であるか。納税の義務は、直接税と間接税との二種に區別されて居る、直接税は營業税、家屋税で、何人もよく知つて居るが、間接税といふ税金は、實に怪しからん税金である。

讀んで字の如く間接的に政府へ税金を持つて行く、即ち第三者の手に依つて納附して居るから我々の所へ、直接區役所や、税務署から税金を取りに來ないが、貧乏人と金持、小供と大人の區別なく、毎日／＼日掛けで税金を出して居る。然も此税金を如何にして取られて居るか知らぬ人がある、故に之をマスイ税と云ふ。恰度魔酔劑をかけた様に身體をシビレかして持つて行く税金である。

例へば鹽に税金を課する、鹽賣る者は損をしない、税金が課せられて高くなると、値段を上げるから使用する人がそれだけの税金を負担するのだ。多くの鹽税を出して居る者は無産階級である、金持はのらりくらり遊んで居るから、鹽の甘い物でも身體が保つ、然し労働者は猛烈に労働するが爲めに汗が出る、如何しても鹽の多い食物を喰はぬと胃袋が承知せない。試みに車夫の背を見よ、走つて來て休むと半天の上が眞白になる、斯くの如く多くの鹽を喰つて居るのだ、岩崎や三井は金があるからと云ふて一度に醬油一斗も吞めはせぬ。住友は代々の金満家でも主人公は一度に鹽一升は喰

はぬ。多くの醤油を呑み、多くの鹽を使用する者は、今日日本に一番澤山居る無産者である。一寸汽車や電車に乗れば一錢づゝ通行税を取られる。一足歩けば何程と云ふ税金を納附して居るのだ。(これは近頃廢止になつた)

次は一時間寝ると何程と云ふ税金が出来るかも知れぬ、一等や二等の汽車に乗る人は普通車の客よりも二倍も三倍も汽車賃を出して居ると威張つて居るが、鐵道省は特等車では年中損をして居る。馬鹿にされて居る三等のお客がなかつたら鐵道は經營出來ないのだ。此三等の乗客は殆んど無産者である、煙草を呑めば煙草の中に税金がある。酒を呑めば税金がある、衣服を着用すれば織物税がある。せんそくの病人じやあるまいし、朝から晩までゼイ／＼でせめられて居る、我々は先づ朝起きると税金の勘定だ、次に生活費の計算だ、昔から税金の安くなつたためしはない。此マスイ税が政府へ何程出て居るかを見ると、日本の國を經營する國家豫算の三分の二はマスイ税だ直接税と云ふ有産階級の税金は僅に三分の一である。然も此税金は昨年生れた小兒、

今年漸く二歳になつたかならぬ位の赤兒まで加へて、全國民に割當ると、一人前が一年間十二圓五十錢である、六人の家族を有する者は一ヶ年約七十五圓といふ税金だ。一ヶ月六圓餘りの税金は高利貸に金を借りた様に天引される、労働者は第一に生産者として雇主から搾取され、次に消費者として賣主から、第三には納税者として政府から絞られる。家賃が滞る米屋の支拂が残る、一枚の衣服も満足に着ることの出來ないのは當然である。夫れで満足に衣服を着け米屋の支拂や、家賃の滞らぬ人があるならば其人間は怪しい奴だ、警察から後を付けてもよい。必ず何か悪い事をして居るに相違はない、親譲りの財産のある人は別物だ、腕と足を頼みに勞力の切賣をして居る労働者が、生活に困ると云ふことは其人が正直に働いて居ると云ふ事を證明して居る、近頃の流行歌に『××××××××、取材、誰が道樂でするものか、貧乏と云ふ字に責られて、苦しまぎれの糞度胸』と云ふのがある。實に今日は悪事を働かねば生存出來ぬ世の中なのだ。日又一日、月又一月、年又一年と犯罪者が多くなる、養育院や監

獄の満員は、芝居や汽車の満員と異つて、決して歓迎すべきことではない。

二、戦國時代

近代の國家の始まりは、封建時代からである、當時は各地に戦争が起り百姓や町人は一日も安心して農業や商業を営むことが出来なかつた、そこで百姓をするものと、戦争をするものと別けて分業的にやることにした、武士は敵を防いで部落の安全を謀る爲めに百姓や町人は取れた米や造つた衣服を報酬として與へて居た、それが日と過ぎ月と重る間に、今日の治者と被治者の關係に轉化したもので、最初の自由契終が破れて、強壓的の權力と變つたのである。

歐洲大陸に於ける封建制度は、殘忍な蠻族の際限のない侵入、一切の法律と秩序との破壊、掠奪を求めて國內を横行する強盜團、及び其結果としてのあらゆる種類の労働者の地位の不安固等の無政府状態の中から起つたものであつた。封建制度の恐るべき缺陷と、賤奴や農奴の悲惨な状態を考案する際に、吾々は兎角封建以前の状態を看過しがちである。滅亡に瀕せるローマの領土の大部分に亘つて、生命と財産の安全と

いふものはなかつた。都鄙の住民は絶えず虐殺、掠奪、放火、及びあらゆる種類の危険に遭遇し、農民は國內の強盜團と外來の蠻族とのために、瞬時も意を安んずることが出来なかつた。

そこで彼等は當然にも何等かの保護を求めずには居らなかつた。けれども農民には自衛の手段を講ずる力がなく、彼等を保護すべき何等の制度も存在しなかつた。随つて戦ひを事とする武士が度々の勝利によつて多くの部下を従へ、一城の主人ともなれば、労働者に對して其生命財産の保護を與へることも出来た。戦國諸侯の間に定められた最も專制的な統治ですらも、全然無制限無秩序な無政府状態よりはましたつたのである。

それは當初に於ては以前の奴隸制度に殆んど何等の優るところもない野蠻な制度であつた。けれども其中からより穩かな、より文明的な制度が生れ出たのであつた。封建諸侯の暴戻振りは、ローマ時代の大地主並びに奴隸所有者のそれと毫も異るところ

はなかつた。が此制度も亦、經濟的及び社會的原因によつて永續することは出来なかつた。偉人の力を不當に過大視する個人主義歴史家の常として、ギボンでさへも、シヤレマンの功業を餘りに重大視し過ぎた。偉人は其時代の自然の潮流を多少早めることは出来るかも知れぬ。或は一時無政府状態を抑へて、秩序を保つことが出来るかも知れぬ。けれども混亂時代に當つて、いかなる人物にせよ、人物の集團にせよ、大勢を勝手に左右することの出来るものでないことは、歴史の教へて居る通りである。豫期せぬ外部からの出来事のために、其時の形勢を益々紛糾させない場合でさへ左様である。まして國內の動亂が相次ぐ上に、外部から攪亂され、ば猶更のことで、いかなる偉人も名君も、確乎たる政策を樹て、其目的を遂行することは出来ない。シヤレマンは西ローマ帝國の四分五裂した領土を打つて一丸とした強大な國家の建設を企てた。彼はその在世中にはその大望を一部分實現したので、先見の明ある名君として稱へられた。けれども彼の死後直ちに起つた變化に照せば、彼の勢力がいかに一時的

皮相的のものであつたか、又それ故に一般人民が受けた利益がどれほど僅かなものであつたかを窺ふことが出来るのである。

彼の死後、社會的及び産業的混亂は更に甚しきを加へた。大多數の諸侯の民衆に對する横暴慘虐は一向其度を減じなかつた。王族は骨肉相食み、貴族もそれに倣つて相殺戮した、ために海賊、掠奪者、回教徒、蠻族等を鎮壓するだけの團結力を得ることが出来なかつた。ノルマン人、アラビア人、及びハン族等は依然として西帝國のあらゆる地方を侵略し續けた。彼等はライン沿岸の一帯に亘つて侵略と屠殺とを行ひ、途上で都邑を焼き拂ひ、寺院、修道院、城塞等から多大の掠奪品を集めた。半ば組織の道程にある封建制度は、是等の傍若無人な蠻族によく對抗する力がなかつた。これと同時に北方から來た海賊はその艦隊を率ゐて、セーヌ河を遡り、一見全然無意味な屠殺と掠奪とを行つた。彼等はドイツに於けると同じく、フランスの地方の都邑を掠奪してからパリーを襲うて其處を荒らした。此スヨンディナヴィアの海賊は、其人數は少

かつたが、慄悍無比であつて、常習的に斯様な抗掠に従事してゐたのである。

然るに侵略された地方の住民の中には、侵略者を恨む代りに、却つてこれと力を合せて、前代の侵略者の後身であるフランスの貴族らを殺戮し、掠奪し、依つて、平素の恨みを晴らしたものが多かつたのである。貴族諸侯が其農奴や賤奴に對して屢々加へた殘虐な刑罰、即ち四脚を切斷し生きながら焚殺するやうな極刑を、蠻族の侵入によつて復讐の機を得た賤奴や農奴が、平素の復讐として貴族や地主の上に加へた例は枚舉に遑がなかつた。

三、一種の強盜

シャールレマンの貧弱な後繼者の時代から其後に亘つて、農民がその勞苦と悲惨の生活に絶望し殊更に侵入者に内通して都邑や城塞を占領させたといふことを、歴史や傳説は傳へて居る。けれども貴族に對する農民の此個人的な復讐は、全體としての農奴や賤奴の生活状態を些かも改善し緩和する効果は持たなかつたのである。如何となればフランスに於ける新しい侵入者は、直きに單なる侵入者ではなく

なつて、王室を始め最高の貴族の家と姻戚關係を生じ、よつて封建諸侯と相結んで、同じような永久的な搾取者且つ壓制者となり終せたからである。斯ようにして彼等は古い侵入者と力を協せて一般民衆に敵對し、且つ階級的支配の問題に關しては、常に極めて狡猾な態度を採るキリスト教とも相結ぶに至つたのである。

カトリック教會は、奴隸制度の解放者であるかの如くに傳へられたと同じく、農民の地位改善に力を致したようにも傳へられて居るが、是又全然無根據の憶説に過ぎない。大僧正達の莊園に於ける農奴や賤奴の状態は、普通の貴族の場合劣るとも優ることはなかつた。フランス革命の時に明かにされたように、彼等の所有地は廣大な面積に亘り、其齎らす収益も巨額に達した。フランスの民衆が忍び難い僧侶階級の篡奪から、多少なりとも解放せらるゝまでには約八百年を要した。即ちフランス大革命の際に大僧正の土地が貴族の土地と共に沒收せられた時、始めて農民は息をついたのである。

勞働大衆が其悲惨を脱するまでには容易ならぬ月日を要した。幾世紀に亘つて歐洲

は東西南北から包圍攻撃を受けた。漸く一團の掠奪者が驅逐されるか、又は土着することを許されるかと思ふと、直ぐ次に同じような慍悍な群がやつて来て虐殺劫掠を繰返した。そして此混亂の中から漸く秩序が発達しかけると同時に十字軍が起され、全然無意味な戦争のために人命と富とが惜しげもなく浪費されたので、混亂は更に甚しくされた。封建諸侯、騎士、家臣等は、國內の一切萬事を放擲し、負債を作り、農奴や賤奴を蹂躪し、都市居住者から搾り取り、あらゆる無理算段をして手に入れた金を懐ろにして、バレスターイン及び小アジアの戦争に出かけた。

病的な頑迷と残忍な迷信とを加へて、愈々益々堪へ難いものにされた此久しい間の災禍の連續を、歐洲の國民がどうして脱出し得たかは實に不思議である。最も虐げられたる階級が、外國の侵入者の援けを藉らすとも、時々復讐をしたことは疑はれない。けれども交互に壓制と復讐とが繰返されたところで、それは些かも社會的進歩を促進することにはならないのである。

封建制度がローマ帝國の二倍ほども長く繼續したのは偶然でない。其領土内に於ける裁判權、及び殆んど絶對の權力を領主に與へた地方的慣例は、ヨーロッパ中の何處に於ても、中央政府の權力と對抗してゐた、けれども地方的必要は中央政府の主權よりも強かつた。上に封建諸侯が君臨し、下に農奴及び賤奴が隸屬する制度は、そのあらゆる缺點にも拘らず、それに代るべき制度がなかつたので幾世紀の間連續したのである。國王又は皇帝は、貴族に對して自己の權力を維持するために、最初は商工業者の勢力の發展を援けたことも稀でなかつた。けれども獨立の都市又は同盟せる數個の都市が富み且つ榮えて、都市の自由を確保し得る力を生ずるに至るや、國王と貴族とは一致して都市に當つた、イタリーの盛大な諸共和國及びドイツの少數都市を除くの外、全ての上層階級は賤奴、農奴及び下層都會民を人間の家畜同然に心得てゐた。よし一方には領民に對して仁政を施した極めて少數の領主があつたにもせよ、それは、遂に農民から領主の望み通りに富を供給する力を奪ひ去つた程に、掠奪を行ふた大多

數の領主の處置を償ふことは出来なかつた。のみならず、其等の貴族の大部分は、實の所その城塞に無賴漢を集めて近隣を荒し歩き、旅人を襲ひ、保護を求めに來た農民を虐げるのを事とする強盜の一種に過ぎなかつたのである。

日本の封建時代は武士階級が横暴を極めたもので『切捨御免』の一語で盡きて居る、百姓や町人が一寸袴の裾へでも觸らうものなら、何と謝罪しても承知せず、『土百姓をこ動かぬ』と、眞向から切付たものである。彼等が贅澤の爲め浪費する費用が税金として百姓や町人より搾取され、それが爲め如何に生活苦に惱されたかは、徳川時代の百姓一揆を見ても明である。

四、結果と原因

銀行家などは毎日人の金を扱ふ内に、自分の金の様に見えてくる。そうだ、役人は國の雇人である、用事を辯じさせる爲に或權限を委託した代理人の様なものだ、所が委任された權力を笠に着て毎日事務を處理して居ると、是は自分が所有して居る獨特の權力で人民などは之に就而何等の喙を容るゝ理由がないと云ふ錯誤

にをちるのだ。人民の爲めの國家である以上、其國家の制度に缺陷があつた場合、國家の一員である國民が、改革を迫るのは當然ではないか、然るに國民の中に何か新しい議論をする者があること、國家を破壊する反逆者として、尾行を附たり、監獄へ入れたりする、一體危険思想を造るのは何者だ、押せば引込む護模球でも、たゞけば飛び上る、下らぬ書籍などを無暗に禁止したりするから、變んな讀方をして悪意に解釋するのだ、社會主義の書籍を讀んで危険思想になり、無政府主義の演説を聞いて過激思想になると言ふならば、石川五衛門の講談や鼠小僧の小説を讀んだものは、皆泥棒になる譯だ、社會主義の本は讀まなくても、現在の制度に缺陷があれば、必然的に、さうならざるを得ないのだ、鼠小僧の小説のなかつた昔の人も、喰に困つた時は人の物を盗んで居る、人の物を盗まねばならぬ境遇、危険思想にならねばならぬ理由は、結果に非ずして原因である。政治の要は容易に悪事をなし難き社會を造ることだ。

病人には藥は必要である、然し藥の必要な人は健康でない、現在の國家では政府は

必要である、然し政府が必要であるだけ現在の國家の不完全なることを裏書するものだ健全な人に藥の必要がない如く、完全な社會には中央集權の必要はない、故に吾々は今日の政府を、『止むを得ざる罪惡』として認めねばならぬ。

(1) 參政權論 (2) 階級闘争と進化

第六編 資本度制と労働者

一、恐慌の原因

人間がまだ原始生活をして居た時代は、一人で家も建れば壁も塗る、米も作れば衣も織ると云ふのだから、それから得た収入の全部は一人で取つても差支へなかつたが、世の中が進歩發達するに連れて分業的となり、家を建てるものと壁を塗るものは別であり、米を作るものと衣を織る者とも別々になつて來た。アダムスミスの富國論にもある通り一本のペンを造るのに十八人からの手数を要すると云ふことである、砲兵工廠の職工の話に依ると一挺の銃を造るのに百五十回の手数が掛る、臺尻の木の處でも五十回以上の手を経ると云ふ、吾々日本人が履く足袋でも、表を縫ふものと裏を縫ふものと、コバゼを付けるものと、之を染めるものと原料を作るものとは別々である、今日どんな物でも全部一人で造つたと云ふものはない、斯の如く社會的に生産されたものを、個人が勝手に分配するからそこに分配の不公平が行は

れ、購買力の衰頽は不景氣を生み、需要と供給の平均が取れず、従つて貧富の懸隔が甚だしくなり、有産者對無産者の階級闘争が起るのだ。

恐慌が一般的な生産過剰の爲めだと云ふのは、實は需要の爲にだと云ふに過ぎない。多くは労働者の需要の不足、労働者の購買力の不足の爲に來るものである。財を需要する者は因より獨り労働者に限らぬか、資本家階級の需要する物品は人員の少いが爲に、到底市場に致命的打撃を與ふるに足らぬ。特に奢侈財に至つては主として富裕者の需要状態の如何に依つて大いなる影響を被るや勿論であるが、之は唯だそう云ふ特殊の種類に財に限られることで、一般的なる恐慌を惹起すに足る可き原因とはなり得ない。之に反して労働者は其一個人の需要する所は成程僅少に過ぎぬけれども、何しろ天下に労働者と名の付く者及び之に準ずる境遇に在る者の數ほど多いものはなく、所謂無産者階級は社會の人々の大部分を占めて居るのであるから、其購買力の増減が一般經濟上に及ぼす影響は甚大なものである。今若し一方に於て生産はいやが上にも

増大して休むことを知らざるに、他方に於て労働者階級の所得は之れに應じて増加するを得ず、従つて其購買力の依然として増加し得ざるに於ては、其多量に増加せる生産は、終に需要不足の爲に賣行かすして終る可きや明がである。斯くて其の生産と由つて生ずる供給とに對して需要と由て行はるゝ消費との甚しく釣合はざるに至れば、一般の生産者は生産物の一部分を幾ら高價に富裕者に賣り得ることも、終に其生産の費用を償ふを得ず、全體の生産に於て收支相償はずして、恐慌を起すに至るべきは又頗る賭易き所である。恐慌は問題としては生産上の問題と云はんよりも、寧ろ分配上の問題として多くの意義を有するものこそせなければならぬ。其原因は先に述し如く、需要の不足に存し、然かも其需要不足と云ふ事實は財を得んとする、欲望の缺けたるにあらずして、需要が實効的の需要たる購買力を缺くことに基因するものだと見れば、之れは畢竟社會の大多數者たる無産者階級の所得の僅少に過ぎたること、其根本原因を爲す次第である。富が公平に分配されず資本主たり企業者たる者が獅子の割

け前を得て、労働者は羊の割け前に甘んぜなければならぬことが、病の根原である。若し資本主も労働者も共に等しく、同じ程度に於て購買力を欠き需要を生じ得ざるものならば、恐慌が分配問題に引懸つて來ないけれども、事實に於て資本主に購買力の缺乏することは有り得ないのであるから、問題が結局分配問題に歸着する譯である。故に恐慌は私的企業の行はるゝが爲めに生ずるものたるに外ならぬ。つまりは現在の經濟に固有なる性質より發生する、一種の痼疾と謂はなければならぬ。

二、資本家の起原

資本主義發生當時の企業は大抵、個人若くは家族であつた。現代の企業組織は、個人的企業、會社企業、組合企業の三に分類せられてゐるが、資本主義發生當時は有力な個人や、權力若くは富を有する一家が最も主要の企業家であつた。彼等は新經濟組織の先驅者であつた。鑛山、航海業、貿易、製造業、金融などが彼等の活動範圍であつた。彼等の活動は必ずしも道德的に正しいものばかりではなかつた。ゾムバルトは原始的企業家として海賊、地主、投機師、高利貸、鑛山業者、奴隸買買

業者、植民地所有者、製造業商人などを擧げ、このうちで富を蓄積し得たものが近世の資本家階級を構成するにあつて、特に製造業商人が其の主要のものであると言つて居る。

今、次に以上の原始的企業家の型の各々について觀察して見やう。

一、海賊 海賊が純粹の企業家でないことは論を俟たないが、彼等の冒險的態度が資本主義に一種の型を示し、其發達に貢献したことは否定し得ない。彼等の掠奪は武力に依る財の交換に外ならない。また彼等は不斷に掠奪に従事したのでなく、掠奪の可能な場合には柔和な商人となつて貿易事業を行つたのである。近世史の初頭に於ては西歐諸國が組織化された海賊艦隊を有してゐたことを示してゐる。義勇船が海賊船となつたり、國家が海賊の援助を得て其目的を貫徹するやうなこともあつた。伊太利の都市には海賊を公許してゐたものもある。英國では十六、七世紀頃には海賊業に従ふものがあつた。また内亂の結果として上流階級で海賊に身を投ずるものも少くなか

つた。若くは海賊に資金を與へ、是れより莫大な利益の分配を受くる冒險紳士の群れもあつた。アメリカ植民地でもニュー・イングランド州の如きは、組織的な海賊業者を持つてゐた。日本でも戰國時代に支那朝鮮の沿岸を劫掠した倭寇は、我國資本主義精神の發達に貢獻するものがあつた。

二、地主 中世の莊園制度は自給自足の經濟單位であつた。そして地主は大部分、消費的地主たることを常としてゐた。然るに中世以後にこの封鎖的經濟組織が破れ、商品流通の展開すると共に地主の中にも、自發的に生産的活動を試みるものを生じたのである。地主の中には農民の勞働力を結合して衣服やビールなどの商品を製造したり鑛山業の經營者となるものを生じてきた。また從來、地主は農民より生産品の貢納や賦役や徵發によりて需要を満たしたのであつたが、貨幣で小作料を徵發するに至り貨幣の流通を喚起すると共に、貨幣の集積をも生ずるに至つたのである。

三、投機師 十六世紀に於て歐洲には投機的精神が漲ぎつてゐた。種々の發見や發

明に關して非常の利益を空想し一舉にして千金を獲得しようとする風潮が盛んになつた。十七世紀以後に盛んになつた株式會社の組織は、熱病の様な傳染状態を示し殊に英佛兩國に甚しかつた。投機師や詐僞師が跳梁して、會社を濫造し、世人の投機心をあふり立てた。殊に有名なのは、ジョン・ローの詐僞行爲であつた。ゾムバルトは十七世紀の和蘭に於ける投機心の面白い例を示して居る。當時、チューリップの栽培が流行して居て、一株數萬圓にも及ぶものが生じた爲め、世人は土地家屋を抵當としてチューリップを栽培したのであるが、一朝海外より、チューリップの大規模の輸入が實行せられるや、忽ちその價格が下落して、數十萬圓のチューリップを有する財産家が一朝にして無一文となり、爲めに經濟界に非常な恐慌が襲つたと云ふ事實がある。

四、高利貸 高利貸は中世以來、ユダヤ人の手に依つて行はれて居た。寺院法は、金錢の貸借に關し利子の徵收を嚴禁し、唯、ユダヤ人にのみ限つて、之れを許してゐた。近世の初め以來、貨幣の流通頻繁となり、資金の需要の増すに従つて、高利貸業者の

數が増へた。當時、高利貸は、金融業者中の最も重なる者であつた。従つて、之れに依つて財産を蓄積せる者を生み、同時に夫等の者は、企業的方面に發展するに至り、近世資本家階級の一構成要素となつたのである。

五、**鑛山業者** 貴金屬に對する欲望は、古來より人間を刺戟して居た。中世には、練金術によりて金を作らうとした。近世の始め以來、鑛山の開發が盛んに實行せられた。最初鑛山業は、貴族や地主の手によつて行はれたが、後には個人も之に熱中するに至り、鑛山業者の一團が生じたのであつた。それは、貴金屬の量を増加したのみならず資本主義精神を刺戟したのであつた。

六、**奴隸賣買業者** 亞弗利加に輸入する爲め亞弗利加に於て、ネグロ狩が盛んに行はれた。奴隸賣買を業とする者が、英國を初めとして當時の歐洲文明諸國に簇出した。普通ネグロの成年男子の平均價格は、その亞弗利加より積出される折は約十五封度であつたが、亞米利加に上陸して賣り渡される折は三十五封度であつた。然し、航海の

途中に於て病氣の爲め死んだり、自殺する者もあつた爲めに、二割五分の奴隸數が減するのを常として居つたと云ふ。彼等は、普通甘蔗及煙草の栽培に使用された。世人は彼等を指して黒色ダイヤモンドと稱して居た。彼等は植民地開發の重要な要素であつた。又歐洲の小國よりは、自國の孤兒や、徒弟を奴隸として、亞米利加に輸出するものもあつた。斯くの如き商業に従事する者は、暴富を蓄積し得たのであつた。

七、**植民地所有者** 歐洲の貴族や大商人は、亞米利加に、植民地を所有する者が少くなかつた。彼等は之を、自ら經營するか、若くは他人に貸し與へて居た。此の一團も近世に於て、富豪となつた者の一つである。

八、**製造業商人** この一團は、自ら資本を有し、之れを農民に貸し與へ商品を製造せしめ、海外に輸出して居た。工業の資本的經營は之れを先驅者とする。多くの工業品が純然たる商品となつたのも、此の一團に待つ所が多いのである。此の種の商人は殊に英國に多く、リッツ市の如きは彼等の根據地であつた。

近世資本家階級となつたものは以上の原始的企業家中、富を蓄積し得たるものである。

三、歴史の暗示

維新革命の當初から日清戦争前後にかけては、我が日本には、資本主義的寄食階級は未だ殆んど無かつたと云つて大過なかつた。當時に於ては、封建的寄食階級たる武士階級の廢滅によつて、國民はその生産の上前をはねられると云ふことから殆んど免かれ、それだけ、生産費を安くしながら、生活程度を向上することが出来たのであつた。然るに、爾來約三十年間に於て、我が資本主義經濟は、奢侈にして無爲な多くの寄生階級を背負はされるに至つた。例へば、維新以來最もよく活動せる分子の多くは、已に、この時に於て老境に入り、老後を驕奢な——壯時盛んに活動せる當時以上に驕奢な——生活に養つてゐる。しかも、その子孫は、今度は働かずに生れながらその驕奢な生活をなしつゝある。斯様な事實が、實業家の間にも、政治家の間にも、軍人、官吏、學者等の間にも、全國到處に於て、鼠算的に蔓延するに至

つたのだ。云ふ迄もなく、彼等の無爲にして驕奢な生活を賄ふためには、我が資本主義經濟は、或は租税の形に於て、或は利子配當の形に於て或は各種の地代家賃等の形に於て、或は手當賞與等の空名に於て、その費用を負擔せねばならない。従つて、これ等の資本主義的寄生階級が數に於て多くなればなる程、質に於て驕奢の程度が強くなればなる程、労働階級に支拂ひ得る賃銀は減少し、しかも生産費は高くなるわけであつて、我が資本主義經濟はいよゝゝ衰微しつゝあるのである。歴史に於て、ローマが驕奢に倒れ、徳川封建制度が奢侈に亡びたと云ふことは、成程その表面に現はれた形式は異なるが、しかし、その實質に於ては、いま、我が資本主義經濟を蝕みつゝある有産階級——資本主義寄生階級——の驕奢と全く意味を同じくする歴史的出來事である。

四、極端と極端

資本制度の生産は不秩序である、何か賣れるとすると、何程の人に對して何れ程入用かと言ふ事も調査せずに、各工場が競争的に無暗に製造する、必

要以上の物が生産されるから、忽ち生産過多の状態となり、事業を縮少したり、工場を閉鎖したりする彼等は生産品の賣れる時は利益の大部分を獨占して居りながら、少し品物の賣行が悪くなるとドン／＼使用人を解雇する、如何に人と世を害する仕事でも、儲かる時は経續するが如何に社會を利用する事業でも、自分に利益のない時は直に中止する、絶ゆることなき失業の、凄慘なる叫はこゝから起るのである、資本家も最初勞働して貯蓄した金は、神聖な勞力の結果である正當の財産に相違なかつたが、それが追々蓄積され會社となり工場となり、多くの社員や職工を使用するやうになり、資本の形式を取つた時から、正當ならざる不勞所得と變つた、即ち『資本論』にある剩餘價値の集積されたものである、故に社會なり國家なりが富むことは、不正でないが個人が富むことは、正當でないことになるのだ。資本家はよく、私は資本金も出して居り苦心もし、努力もして居るから利益の大部分を取るのは正當だと云ふが此議論が立つとすれば他人のものをドロボーする強盜も戸を破る道具や繩楷子に金を費ひ

一方ならぬ苦心や努力をするから正當だと云ふことになる、如何に資本を出しても努力しても人の物を取つては悪いと云ふ以上そんなことは理屈にはならぬ。

現在の資本主義制度には種々の矛盾と撞着がある、福田博士の『國民經濟講話』の中に、朝鮮の仁川で人參を焼くことが書いてある、人參と云ふものは滋養に富んだもので、價も高いものだ、そんな高價な人參を如何して焼いたかと云ふに、それは商人が値段を釣り上げる爲だと云ふ、英國では港へ船が入る前に、蠣を箆に入れたまゝ、海中へ投げ捨てること云ふ實例を挙げ、クロポトキンはその名著『パンの略取』で攻撃して、撫順では石灰が一噸二圓だが大連に來ると六圓となり九州迄來ると十四五圓になる若し之を二十五圓より下の、當り前の相場で賣らうものなら大變だ九州諸炭山は忽ち反對の聲を上げる日本の石炭業を撲滅するものだ云つて國家の危急存亡に關するやうに騒ぐ。従つて日本の住民は二圓の石炭を二十五圓で買ひ、それに連れて諸物價が皆んな高くなるのを我慢してゐなければならぬ。

機械が發明されて百人でした仕事が五十人で出来るやうになると、十二時間の労働を八時間にしないで職工を首切るから、失業者が段々殖えて行く、新發明の機械の恩恵を受けるものは少數の資本家で、大多數の労働者は職に離れて妻子を飢させねばならぬことになるのだ、質屋の倉に衣服が一パイあり、呉服屋は太物が賣れないので困つて居るが、暑くなつても綿入を着て居たり、寒い時單衣を着たりして居るものがある。東京の深川倉庫には、下積になつた米はブス／＼腐つて居るが、近くの蛤町や日暮里の貧民窟では、此の腐つた米を買つて喰ふことも出来ず二錢か三錢で殘飯を買つて來て、之に水を入れ搔廻して吞んで居る。それが爲め營養不良になつて小供が死んだりコレラで死んだりして居る、ロシアの飢饉のやうに、何にも喰ふものがない爲めに、餓死するものがあるといふなら不思議はないが、一方では餘り滋養物を喰ひすぎて、營養過多といふ病氣で死んで居る者があるから不思議だ、全國に貧乏で學校へ這入ることの出來ぬ兒童が三十萬人もあると云ふ、大學が千萬出來たつて、それは金持のドラ息

子に寢言を教へるにすぎぬ。

五、狐には穴

東京ばかりではないが、市内から郊外へかけて、至る所、斜に帖られた『かしや』札に不景氣風が無遠慮に吹きまくつて居る。立ち腐れになつて居る空家が四萬軒もあつて一方では棲むに家なく、居るに處なく、他人の家に同居したり、公園や停車場に查公に、追まくられながら、僅に晝のつかれを休めて居る哀れな人々がある。赤坂や麻布あたりへ行つて見よ、周圍何町と云ふ、華族や富豪の屋敷が昂然と構へて居る彼等は三人位の家族で廿室以上の大屋敷に住居し、此大屋敷を掃除する爲に十數人の下男や下女を使つて居る。人間必要の生活條件としては一人に對して一室か二室あればいいのだ、一年に一度も使はぬやうな多く山の室を何にするのだ、之を贅澤と云はずして何んど云ふ。

一方深川や、本所の貧民窟へ行つて見よ、眞夏の暑い時でも、二疊敷のバラックに親子六人の家族が、折重つて寢て居るではないか、然も蚊帳がない爲めに、ナンキン

袋の中へ頭だけ突込んで居る。十何疊と云ふ大廣間に、裾模様の蚊帳の中に安眠して居る特權階級と比較して同じ人間としては餘りに懸隔があり過ぎるではないか。ロシアでは革命後、富豪や貴族の大邸宅は學校や病院や俱樂部に使用されたりいくつにも仕切つて幾家族も棲んだりして居るさうだ、我儘一ぱいに暮して來たブルジョアから見たらボルシエキの奴等は、惡魔にも見やう、然し豚のやうな生活をして居たプロレタリアに取つては、此世ながらの天國だ。

『狐には穴あり空飛ぶ鳥には巢あり、されど人の子には枕する處なし』とは二千年前のキリストの言葉だが、今頃こんな言葉が役に立つとは情ないことだ。

一等の米を作る農民は粥を嘗め、上等の衣を織る女工は木綿の衣服も着られず、最も速力の早い自動車を造る職工は、電車にも乗れないでテク／＼歩いて居り、八階のビルディングを建てた大工はバラックに震へて居る。『働けど、働けど尙我くらし、樂にならざり、ジット手を見る。』とは、詩人の空言ではない。

ナイヤガラの大瀑布はオンタリオ湖に落ちんが爲めに轟き、全世界は社會主義に來らんが爲めに沸騰して居る、屢々起るライオットが更に起るべき何事かを暗示して居るではないか、明日にも爆發するか知れぬ、噴火山上に舞踏するものは、今の富豪、貴族、資本家、政治家の徒である、彼等は時運の發展を認めない故に來らんとする變動を知らないのである、彼等が金殿玉樓に酒池肉林の歡樂に耽ける時、哀れむべき貧民労働者は、失業の苦痛、生活の困難に脅かされ、貴族や資本家の食卓から溢れ落ちる一片のパン屑で、漸く露命を繋いで居るのだ、こんな不公平な、こんな不合理な世の中が何時までも續く道理はない、爲政者も一般社會も、長夜の眠りから醒めて、適當な方法を講じなかつたならば、それこそ悔いても及ばぬ結論に到達するのだ。

(1) 社會問題及社會運動 (2) 社會と進化 (4) 資本論解説

第七編 結論

一、理想と現實

地球の起源から地主と小作人の對立を見ても、人類の發生から貴族と新平民の階級を見ても、原始生活から男子と女子の關係を見ても、封建時代から政府と國民の立場を見ても、資本制度から金持と貧乏人の現在を見ても、土地は共有であり、人間に階級はなく、男女は平等であり、言論は自由であり、生産の分配は公平でなければならぬ、然るに之が全然無視されて居るにも抱はらず、左程にも感ぜないのは永い間の習慣の爲に正しい道理を忘れた結果に外ならない。

引例が少し汚ないが、東京で家を借りる時其家の便所へした小便や大便は地主のものになる、吾々は家を借りる時、此家の便所へした大便や小便は地主のものであると言ふ約束をしたことがない、自分が働いて得た金で、薪を買ひ、米も野菜も皆買つて煮て喰つたのだ、それが胃——腸から肛門へと出て、然も自分が家賃を拂つて居る家

の便所へ落ちたのだ、『これは俺の小便だ』、『それは君の大便である』世の中でこれ程所有權の明白なものはない、不思議なる哉此大便や小便が、自分の肉體から離れると地主に取られて仕舞ふ、これを取られても不思議に思はないのは、自分の物でないからではなく唯永い間の習慣の爲め、自分の物であると言ふことを忘れたのだ、以上の諸問題に對しても、餘り不思議な感を懷かないのは、昨日や今日起つた問題でなく、五十年も百年も、二百年も三百年も、何千年と言ふ昔から、征服されたり、搾取されたりした長い間の習慣が——一種の奴隸根性が迷信の如く、傳統的に頭の中へ深くく沁み込んで居るからである。此永い間にシミ込んだ奴隸根性は却々一朝一夕に取れるものではない。

『自然は一足飛をなさず』と言ふ原則通り、政治上の革命は或機會に一舉にして行はれることはあるが、經濟上の革命は相當の時間を要する、革命の時こそ一度に五十年も百年も飛んだやうに思はれるが舊社會と新社會のつなぎを取る爲には、一時後戻を

せなければならぬ。不完全だと言つても現在の社會は、何千年の進化の結果だから不思議な處に意外な仕掛があつて、理想主義者が一夜に造出したユートピアのやうな單純なものではない、猿の尻尾を切つて洋服を着ても人間にはならぬ、人間が猿から進化したと言つても、何萬年と言ふ永い日月を要して居るのだ、一世紀前にあつた佛蘭西革命の理想が未だに實現されず近くはロシア革命に於ても單位を下げ、新經濟政策を實施したなどはよい手本である、と言つて現在の國家が何時までも續くものと思ふ者があつたら其奴は低脳兒だ、×××資本制度が崩壊して、社會主義の社會が來るのは、後足で立つやうになつた人間の前足が手に變つたと同じことだ、頻々として起るストライキやサボタージユは、將に來らんとする×××に向ふ無産階級の進軍行動である、貴族や資本家から見れば社會運動や労働運動は不都合なことかも知れぬが、それは龜の甲が堅く兎の後足が長いのも同じである、龜や兎を喰ふ動物から見れば不都合かも知れぬが、彼等に取つては當然な正當防衛である。

資本主義制度は原始社會から理想社會への過渡期の一現象で、永久性のものではない、資本制度が倒れると言ふことは、秋になれば草は枯れ木の葉が落ちると同じことで翌年になれば更に新しい芽が出て花が咲くと言ふことを意味するものだ、先に起つたロシアの革命は、資本主義世界の一角が將に崩壊したもので、あの革命が成功したにせよ、失敗したにせよ、人間の歴史があつて以來、始めて起つた此大問題に對し徒に攻撃ばかりして居らず、その短所と長所とを眞面目に研究する必要があると思ふ、日本のやうなちつぽけな國でさへ、明治維新の革命の際薩長の浪人が討幕論を唱えてから、征韓論が産んだ西南戦争までに、前後二十年からの歲月を要して居る、況んや世界の六分の一を有して居るロシアが、然も資本主義世界の真中で、五年や十年で理想を實現出來ないのは、當然過ぎる程當然なことだ反對者は勞農政府の新經濟政策は、資本主義への降伏だと言ふが、レニン等が無産階級の獨裁を斷行したればこそ、今日まで握つて居れたので、亡命當時のやうな理想論をやつて居たら、今頃は反動を受け

て吹き飛んで居たに違ひない、革命さへ来れば一夜にモリスの理想郷でも来るやうに思つて居るのは、あまり人間世界を甘く見過ぎた（震災當時に於ける自警團や憲兵や愚民の行爲を見よ）無智な人間の囁言だ。長い人類の歴史に比較して、個人の生命は餘りに短い、此短日月に結論を見やうとするから成功を急ぐことになるのだ、人間の社會生活を知るには、人間ばかり研究して居たのでは判るものではない、人間以外の動物の生活や習性を研究して、それから推定せねばならぬ。

吾々は實驗の上に立つより外はない。失敗は吾々に更に來るべき光明を教へるものだ、面倒臭くても一步より更に一步と進むの外はないのだ、それが馬鹿らしいと言つて空想的革命論者になるのは觀念に重きを置く精神主義の哲學者と選ぶ所はない、理想へ到達するには現實の階段がある、理想はイクラ高くてもよい、然し大地について居る此足を忘れてはならぬ。

二、打開と建設

政界は行詰つた財界も行詰つた、世上一切の事象が、悉く行詰つ

て居る『何とかせねばならぬ、之では仕方がない』と言ひながら、政治家も、實業家も坊主も、軍人も黙々として其日々々を送つて居る、實際何人も手出しの出來ないのは現在の状態である。

例ふれば之、歐洲通ひの日本丸が、暗礁に乗り上げたと言ふ光景だ、船は一波毎に沈んで行く甲板の船客は右に左に逃げ惑ひ、何等自衛の策も講せず、徒に斷末魔の悲鳴を上げて居る、慙うした事實は、これまでの日本にも度々あつた、幕末に於ける徳川の政治は當時の一切を反映して居る。幕府にも有爲の人物がありながら移りゆく時代の影をみつめつゝ、江戸城明渡の大詰まで、何事もなし得なかつたのは、永い間の傳統的惡弊と、多くの舅と小舅との横槍の爲めである、時恰も一世の潮流に棹さした薩長の野武士が、電光一閃、快力亂麻を斷つたのは、彼等には何の情實もなく、何の束縛もなかつたからである。

現在の政界に必ずしも人なしとは言はぬ、唯彼等に多くの舅があり、小舅がある加

ふるに傳統的の悪弊がある、如何に志があつても、十重二十重にからまりついた、手抛足抛で身動きが出来ぬ、彼等に向つて、行詰つて居る現状を打開せよと迫るのは、幕府の役人に維新の大業をやれと言ふのと同じだ、維新の革命は、何等の束縛、何等の傳統なき、天馬空を行く薩長の浪人にして、始めてなし得ることだ。敢て流血の×を叫ぶのではないが、何時までも同じ人間が同じことをくり返して居ると、その事の善悪に依らず一種の臭味がつく、此臭味が現在の日本を暗黒のドン底へ、引づり込んで行くのだ。

將來の日本を背負つて立つ者は、大勳位でもなく、何公爵でもない巷に彷徨する無名のプロである、時の勢に反抗する者は、その力に打ち碎かるべきは、理の當然だ、總てを打開して總てを建設せよ！

(一)進化論講話

藤田浪人編著

- ◆ 参政權の要求論 (絶版)
- ◆ 墓 (絶版)
- ◆ 民約 (絶版)
- ◆ 社會問題大觀 (既刊)
- ◆ 五月一日 (品切)
- ◆ 民衆に與ふ (品切)
- ◆ 反逆情史 (禁止)
- ◆ 社會物語 (新刊)
- ◆ 名社 (近刊)
- ◆ 戀名 (近刊)
- ◆ 獄窓 (近刊)
- ◆ 雜記 (近刊)
- ◆ 帳 (近刊)

問題社出版部

大正十五年七月十日印刷
大正十五年七月十五日發行

定價參拾錢

東京市外吉祥寺二六九一

發行兼編輯印刷人

藤田貞二

東京市京橋區木挽町一ノ二一

印刷所

地涌學會印刷所

東京市麴町區有樂町一ノ三

發行所

問題社出版部

振替東京七三九九九番

295
151

終

社 題 問